

エンカウンター・グループ・フォーラム

—私たちの問いなおしと展望—

人間関係研究会20周年記念
プレゼンテーションと参加者の声

人間関係研究会資料 No. 13

目 次

まえがき

セッション2 1990年5月4日(金) 9:00~12:00

小柳 晴生-----1

林 もも子-----17

セッション3 1990年5月4日(金) 14:00~18:00

大築 明生-----41

田久保 園子-----56

セッション4 1990年5月5日(土) 9:00~12:00

村山 正治-----72

あとがき

まえがき

1970年に本会が発足して、20年が経過した。それを記念して、本会は、『エンカウンター・グループから学ぶ』（九州大学出版会）を出版し、また、本会の『20年史』を刊行すると共に、この『エンカウンター・グループ・フォーラム』を開催してきた。

このフォーラムの概要は、『ENCOUNTER 出会いの広場』No.12（1991）に記されており、その読者の多くには既に知られているが、その内容の詳細についてはまだ公にされるに至らなかった。フォーラム開催からだいぶ日時が経過したが、その内容は、エンカウンター・グループに関心を寄せる者にとって多くの示唆を含み貴重な資料となると思われるので、このような形で刊行することにした。

フォーラムは、別記のスケジュールにほぼ沿ってすすめられた。ここでは、このうち、セッション2（『いま』5月4日9:00～12:00）での2つのプレゼンテーション（小柳、林）、セッション3（『これから』同4日14:00～18:00）での2つのそれ（大築、田久保）、セッション4（『これから』の続き他、同5日9:00～12:00）での1つ（村山）を記載してある。

このような記載に至るまでには、多くの方々の労力が伴っている。まず、このフォーラムのテープ録音を文字化する労力があつた。このテープ起こしは、『清里プログラム』などにも参加した森尾邦江さんが快く引き受けてくれ、400字原稿用紙550枚にも及ぶ素稿をつくって頂いた。この労力は大変なことであつたと思うし、この素稿なしにはこのような形にはならなかった。この機に改めてお礼を申しあげたい。

素稿はほぼ逐語的であつたので、これをわかりやすい形（文章）にする必要があつた。これには、プレゼンターの意を損なわないよう留意して、増田が行った。結構時間を要する仕事であつた。これも労力の一つに数えさせて頂きたい、と思う。

さらに、このようにして作成された原稿をワープロ化してもらった。私は、

いまだにワープロ作業を身につけていないので、私の所属する大学の学生や院
生にこれを依頼した。数回にわたっての訂正などを加えてやっと完成原稿と
なった。これにも深く謝意を表したい。

記載の仕方としては、プレゼンターのそのときの表現をできる限り再現
できるよう考慮して、小見出しなどを入れなかった。読みやすさに欠けるかも
知れないが、プレゼンターの味をそのまま生かそう、という意図である。ご了
承頂きたい。

このフォーラムの内容をできる限り多くの方々に知って頂くよう公にすること
が、フォーラム開催後の課題であった。この間、プレゼンターの何人かはこ
れに類した内容を他所で公表しているが、エンカウンター・グループに関して
このような形でまとめられた資料は、利するにより便であろう。

セッション1（『これまで』 5月 3日14:00～18:00）およびセッション
4（5月 5日）の後半は、プレゼンテーションがなく参加者の自由な発言に
よってすすめられたので、この資料では割愛した。スケジュール全体などにつ
いては、次頁以下の〈別記〉を参照して頂きたい。

〈別記〉

人間関係研究会・20周年記念
エンカウンター・グループ・フォーラム
ー私たちの問いなおしと展望ー

***** 第2報 *****

いよいよEGフォーラムが間近（ホントニ）になりました。総勢30名でEGの「これまで」「いま」そして「これから」について語り合うことになりました。

もう少し、詳しい内容をお知らせいたします。お心、お気持、お考えのご準備をお願いいたします。

なお、3日は、午後1時（スタッフは11時）に、小田急伊勢原駅北口（第1報では西口とご案内致しましたが、訂正します。）から、マイクロバスが出ます。

なた、各セッションについては、記録に残し、後日何らかの形で世に問うことを計画しておりますので、テープ録音、写真を撮ることをご了承下さい。

スケジュール（案）

おおよそ次のようなスケジュールを考えておりますが、皆様と話し合いながら決めていきたいと思ひます。

9—10—11—12—13—14—15—16—17—18—19—						
5/3				受付	セッション 1 (これまで)	夕食 フリー
5/4	朝食	セッション2 (いま)	昼食	セッション 3 (これから)		夕食 フリー
5/5	朝食	セッション4 ?	出発			

【セッション 1】

エンカウンター・グループを通してさまざまな人との出会い、そして自分との出会いがあった。そして、その人たちは、自分は、今、どのように生きているのであろうか。“グループ”が、それぞれの“人”が、その“体験”が、一人一人にとってどのような意味があったのだろうか。

フォーラムの初めに当たって、まずは原点に立ち戻り、私たち一人一人のエンカウンター・グループとのかかわりの歴史について、じっくりシェアしたいと思います。ここでは全員がプレゼンターです。

（世話人）増田、渡辺

【セッション 2】

E Gの「いま」を、いくつかの角度から照らし出してみようとするセッションにしたいと思えます。話題提供者は、次のような方々を予定しております。

- ・小柳晴生：「現代社会におけるE Gの意義」
- ・林もも子：「私のE G研究の現在」
- ・見藤隆子、永原伸彦：「E Gの現状と問題点」

これらは、公式のスキのない発表というよりも、自由にノビノビと、いま、自分のなかで“うごめいている”ものを、生に近い形で出し合えるようなものにしたいと考えております。

(世話人) 永原、中川、見藤

【セッション 3】

エンカウンター・グループのこれからを語り合おうというこのセッションの中心テーマとして、われわれ世話人はエンカウンター・グループの地域・社会への関わり、そこにあるさまざまな切実な問題との接点を探ることをかけました。このセッションの構造としては議論が具体的なものとなることを願って、3人のリソース・パーソンに20分から30分ずつそれぞれの経験にもとづいて問題の存在を具体的に話して頂いた上で（短い休憩をはさんで）全体での討議に移る予定です。まずスタッフの村山正治さんにはこれまでの福人研の活動の経験をベースに、広く地域へのエンカウンター・グループのかかわりの将来について話して頂けるのではと期待しています。次に、今日の日本の社会、特に教育の病理を露わにしている登校拒否の問題への関わりについて、茨城人間関係研究所の大築明生さんにご自分の父親としての体験を交えて話して頂きます。（ここでは是非小野さんの発言をお願いしたいと思います。）最後に浄土真宗の女性僧侶であり東京ビハークにあって末期癌患者の訪問活動や癌患者家族会の活動などを続けておられる田久保園子さんに、そこで感じておられる問題について話して頂いて、老病死やそこでの援助の問題を一緒に考えられたらと思います。

従来主としてワークショップや教育分野（看護教育を含む）での研究を中心に展開されてきたエンカウンター・グループのこれからの課題として、ここでは地域・社会へのかかわりの可能性一つにしばってテーマとしてみたいわけですが、もっと他に重要なテーマがあるというご指摘もあろうかと思えますから、このことの可否を含めて実りある話し合いが行われることを世話人一同こころから願っております。

【セッション 4】

この時間は、とくに特別の計画はありません。これまでのセッションで言い残したこと、もう少し聞きたいこと、あるいは大山参りなど、皆様のおこころ次第です。

以上です。

セッション 2

1990年5月4日(金) 9:00~12:00

プレゼンテーション 1 小柳晴生

【永原】

それでは始めさせていただきます。『いま』というセッションでは、基本的なことに立ちもどり、足元をしっかりと見つめ直したいと思います。エンカウンター・グループの意義や自分たちがやろうとしている本質というようなことをとりあげたいと思います。

最初に小柳さんの方から『現代社会におけるエンカウンター・グループの意義』を、それから林さんの現在研究されているところを話して頂いて、その後に現状と問題点を出していきたいと思います。

【小柳】

私が初めてエンカウンター・グループに出会ったのは、大学2年の時でした。1972年、この会のスタッフでもあった多田治夫先生の『臨床心理学』という講義に強い関心をもって行ったら、数回自由な話しあいを中心とする風変わりな授業があって、その後は3泊4日の集中講義にするから、それに出れば2単位が出る、と言うので行きました。それが最初のエンカウンター・グループの体験です。

まだ1970年の学生紛争のほとぼりがさめていない時代で、私はカウンセリングに対して否定的な感情をもっていましたので、「絶対こういうものにひっかからないぞ」と肩ひじを張り、すごい意気込みで参加して、エンカウンター乗っ取り作戦なるものをセッションが終わるたびに話しあったりしました。それで、かなり乗っ取りの方は成功したのですが、しかし、結果としてはエンカウンター・グループに僕自身が非常に揺るがされたというか、自分が人を説得で変えようとするいまのやり方はどうもおかしい、ということに気づかされてしまった。さらに自分の心の奥に、強い甘えや劣等感があること

も垣間みせられてしまった。

それから、友田不二男先生のカウンセリング・ワークショップに出たり、人間関係研究会では1975年に畠瀬ご夫妻がやられている『夫婦のためのエンカウンター・グループ』に参加しました。その時、木村ご夫妻も一緒に参加しておられました。それから今日まで17年間に150回ぐらいのエンカウンター・グループをやっているのですけれども、とても多すぎて整理できないのですが、エンカウンター・グループとは何なんだろうかという疑問が片時も離れないでいます。いい時はいい時で、いい経験ができない時期がずっと続いた時には限界があるのではないかと、と良きにつけ悪きにつけ一体エンカウンター・グループとは何なんだろうかと考えていました。

いずれにせよずっとエンカウンター・グループは興味のトップに占めてきたのですが、いつまでたってもまとめきれなくて、卒論でやり、修論でやり、どれもこれも破綻して、表には出ないというか流産したようになっていきます。そのうちにだんだんと関心のありようが、どんな社会的背景、歴史的な流れの必然性があるのか、このムーブメントが生まれてきたのか、しかも、このムーブメントは続く性質のものなのかということに変わっていききました。エンカウンター・グループの他にもどんどんいろいろな新しい誘いというか、フォーカシングあり、家族療法あり、ゲシュタルトといろいろ出てくるわけです。僕はグループにほとんど何ももちこまないベーシック・エンカウンター・グループが好きなのですけれども、単に好きなだけではなかなか説得力がない。僕が魅かれる根源的な意味を解明したいと考えました。それは、同時にエンカウンター・グループが好事家の集まりで終始していくものなのか、それとももっと広く世の中に受け入れられる性質をもっているのかを解明したいと思ったのです。

意欲だけはすごいのですがなかなかできなくて、その一端が今回お話しする社会的意義ということです。エンカウンター・グループがムーブメントだというのは、ロジャースの『エンカウンター・グループ』を読んでも「20世紀で最も可能性のある発明であり、社会の人の切実な要求を反映している」と書いてある。しかし、どのような要求かはっきり書いていないし、どのような社会的背景からか、歴史的背景からかに焦点を当てた研究もあまりなされ

てこなかったと思います。国分先生の『グループ・エンカウンター』とか、最近出ました都留先生の『出会いの心理学』という本にはそれぞれ少しずつは触られています。内容的には納得しますけれども、あまりたくさんのページを割いて書いてあるわけではない。この両者とも全体のトーンとして、現代社会がいろいろな意味で悪くなった、人間が生きていきにくくなっており、それを救済するというか、改善する、あるいは、補完するという主張です。つまり、今の社会をネガティブに見て、それを救済するものとしてエンカウンター・グループを位置づけていると思います。これにどうも納得がいかないのです。

私は今回三つの観点から話したいと思っていますが、まずグループの非効率性について触れたいと思います。例えば、今回のこの20周年の会を主催している人間関係研究会の会合のもち方を見ても、非常にいい加減なところがあります。オープニングに畠瀬稔先生が基調講演するというようにはなっていない。そして、プレゼンテーションは、集まってそれぞれがやりましょうというようにすすめている。堅苦しくやらなくたって、人間が集まればそれぞれの人が納得するだけの素晴らしいものが出てくるに違いない、いや出てこないかもしれないという、あやふやさに賭けてみるという、そういうところが今回の20周年の会だと思うのです。必ずしも準備に準備を重ねてきちっといい結果が出なくてもいいじゃないかという、そういう非効率的な運営なのですから、その辺はエンカウンター・グループと共通する大きな特徴であると思います。

二番目は、そうした非効率性に加えて目的・方法の曖昧さ、目的が有るようで無いことです。エンカウンター・グループのメンバーを募集する時にはいろいろな表現を掲げますけれども、説明はできるようでできない。その曖昧さにエンカウンターの特徴があるのです。なぜそういう特徴があるのか、ということについても考えてみたいと思います。

三番目は、なぜ集団でやらなければいけないのか。自己探求にしても対人関係の改善にしても、カウンセラーと二人でやった方が安全だったり確かだったりするのに、なぜわざわざ非常に不確定な要素をいっぱいもつ集団でやるのか。これもやはりエンカウンター・グループの特徴だと思います。以上三つ

は、恣意的ですが、私がエンカウンター・グループをエンカウンター・グループたらしめていると考えているものです。

これを検討する際に、説明としてはなるべく「人間的」とか、「人間尊重」という言葉は使わないようにしました。というのは、異論があるかもしれませんが、私はヒューマニズムはひとつのイデオロギーだと考えており、イデオロギーというのは共有する人の間では話が通じるけれども、そうでない人とは通じない。何を「人間的」とするかというのは人によって全然違うので、できるだけ使わないで説明したいと思います。

最初に効率追求的でないことから始めます。エンカウンター・グループというのは、現代の人々が非常にせき立てられて生きている、そういうことに対する異議申し立てとして「そういう生き方はおかしい」ということから出てきています。1980年代あるいは90年代というのは、200年程前に産業革命があり、その結果産業化社会になったのですが、その200年間続いた産業社会がどうも変わりつつある、と考えられます。最近、かなり沢山の人たちが、脱産業化社会と言ったり、脱工業化社会の到来と表現されたりするのですけれども、非常に大きな社会変動がきているのではないかと言われています。A. トフラーも『第三の波』のなかで言っています。その産業化社会を支えてきた性格構造、適応的な性格構造というのがあって、産業化社会が変われば、その次に来たるべき時代の適応的な性格構造も変わらざるを得ない。産業化社会を支えてきた性格構造は、いろいろな形で言われているのですけれども、70年代のヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントの一人の旗手であったチャールズ・ライクは『緑色革命』のなかでこのように言っています。「合理的生産システムに適応する人間は、目標・能率・競争から過去と未来の管理に拘泥する。外側を殻で被われているので非人間的な関係しかもてなくて、感覚に鈍感で融通が利かない、非常に堅いタイプをつくっている」と。そういう人間がこれまで適応的であり産業社会を支えてきた、と言うのです。ヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントは、役割的な関係でしか人間関係を結べないことを批判し、こういう生活態度から脱却しようという主張なのです。

これと同じことを、山崎正和が『柔らかな個人主義の誕生』のなかで述べて

います。これまでの産業構造を支えてきた性格構造は、ひと言で言えば、強迫性格ではないかと思います。サルズマンの『強迫性格』という著書には「強迫性格は今日もっとも多く見られるパーソナリティであり、その特徴は自分の不完全性、誤謬性、人間性を自覚しないでおころうとする、全知全能であるとする、神になろうとする性格」と書いています。つまり、過ちのない、先も予見できる、過去も公開しない、全く失敗なき人生という、そういう生き方を求めるような性格です。これは、ライクや山崎などの言っている性格構造と一致すると思います。

エンカウンター・グループというのは、神になろうとする試みをくじく試みというか、人間というのはもっと弱いし、完全でなくてもいいのだということに単に認めるだけではなくて積極的に受け入れる、そういう試みではないかと思います。そういう意味でエンカウンター・グループというのは、強迫性からの脱却という大きな作用、機能を果たしていると思うのです。エンカウンター・グループの説明としていままで人間的とか組織の人間関係改善と言ってきましたが、人間性という言葉よりも強迫的でなくなると言った方がより正確に表現できる、と思っています。畠瀬直子さんは、エンカウンター・グループの機能として情緒性の再確認を強調しています。今の社会では情緒が失われつつあり、エンカウンター・グループはそれを再確認する機能がある、と考えられるのです。情緒性がなくなるというのも強迫性の特徴です。情緒というのは、不確実だからという理由で生活から排除される傾向がありますが、情緒性の再確認、情緒を自分の生活のなかに組み入れることは強迫的でなくなることです。

情緒性の再確認の他に、身体感覚あるいは身体性ということがあります。強迫性というのは、できるだけ身体性を排除するというか、動物性を排除する傾向があります。身体を自分のコントロールの対象というか、思うように動かす機械のような扱いをするのです。そうではなくて、身体には身体の意志があり、自分の身体を統合して生きていこう、というのが強迫的でない生き方なのです。エンカウンター・グループでは、いわゆる身体と心の統合という動きがあります。これらは、強迫性から脱却して情緒性、身体性を再確認して、強迫的でない生き方をしようとする一連の動きとしてまとめることができるのでは

ないかと思います。

さらに、エンカウンター・グループは「現在を生きる」ということを非常に強調しています。「いまを味わう」と言ったりします。強迫性格は過去と未来に非常に関心があり、神経症的な人は過去と未来に拘泥して現在をなかなか生きることができないのです。エンカウンター・グループが現在を強調することも、強迫的でない生き方を促すという働きをもっている、と考えられます。情緒性の回復とか、今ここでという現在の強調とか、それから効率を追求しないというようなエンカウンター・グループのもつ多くの要素が、強迫的でないライフスタイルを生み出すための工夫であるように思います。

話は少し変わるのですが、目的追求でないという性質は、全く別の機能をもっているのです。私たちはこれから時間に直面させられる時代を迎えると考えられます。生活を支えるための時間が減って、自由裁量のきく時間が非常に増えてくるのです。それをいかに充実して使うか、どう納得して使うか、という難しい問題に直面させられるのです。

そういう意味ではエンカウンター・グループは、たっぷりと時間を使えて、かつ充実感を味わえる工夫とも考えられます。しかも、まがいものの充実感ではなくて、確かな充実感を味わえるという意味で、これから来たるべき時間消費型のライフスタイルを学ぶ場とも考えられます。

次にエンカウターの目的や過程の曖昧さに触れたいと思います。エンカウンター・グループというのは、基本的に目的がないのです。エンカウンター・グループは、容器、容れ物であって、何をもち込み、何を引き出すかは参加者が決める、参加者が目標をもち込むのであって、主催者がもち込むものではないのです。

私は「曖昧さのなかでの自分探し」という表現を使いますが、エンカウンター・グループには目的がないところに意味があるのです。それは参加者がエンカウンター・グループという容器のなかで「いったい自分は何をしたら充実するだろうか」ということを自分の感情を手がかりに探すのです。自分は何をもって充実するかというのは、「自分探し」に他ならないのです。そういう意味では「自己との出会い」というのは非常に根源的な命題だという気がしてい

ます。

このような文脈は、これまでも言われているのですが、かなり否定的に語られています。例えば、今の世のなかでは自我同一性が混乱しやすいから、自分を探す機会が必要である、というように言われたりします。これを別の視点から見ることもできます。これまでは多くの人が貧乏な生活をしてきており、貧乏だと欲しいものがはっきりしていて、探す必要がないのです。ところが貧乏から解放されて、生活するうえで必要なものは充たされ、精神的な充足を求める時代に入っていくと、それぞれ満足するものが個々バラバラになる。そうすると、自分がそれぞれ手探りの中でおぼつかない感覚を頼りに探していかなるを得ない時代になる。それは、ある意味では本当の自己実現というか、自分を実現しうる可能性をもっているようになった時代が到来した、と言えるのです。

しかし、それは、実際に来てみれば非常に苦しい時代なのです。そうした探求を可能にするのは、外からの目標がない場所でないといけない。そういう意味でエンカウンター・グループの目的のなさ、そういう探求を可能にするための工夫だったと言えるのではないか、と思います。

ジェンドリンは、これからの社会はそれぞれが工夫して、それぞれがその場で対応していかなるを得ないような場面が増える、と言っています。変化のスピードが非常に速く、そのときに必要なのは知識ではなくて、事態に対応できる知恵である。エンカウンター・グループというのは来たるべき時代を生きる知恵を育てるものだ、とも言えます。柔軟な対応力、判断力、創造性とかいろいろな言い方ができるのですが、知恵を育てるというように言えると思います。エンカウンター・グループは教育界で今日盛んに行われていますけれども、知識偏重では足りない、知恵を育てるという具体的な力をもったものとして、エンカウンター・グループが教育界のなかに採り入れられているのだ、と思います。

三番目は集団性ということです。なぜカウンセラーと二人でやらないのか、なぜ集団でやるのかということです。ひとつの理由は、人口の移動が非常に激しくなって、これまで私たちを支えてきた地縁なり血縁なり、私たちを縛って

いると同時に安定感を与えていたものが急速に減っていった、その代わりを私たちは自らでつくり出さざるを得なくなっている、という事実があります。こうした変化を「誰も人のことを面倒見ない。地域のなかで挨拶もしなくなつた。」と批判的に言われたりしますが、自分の好みで集団をつくれる時代になっている、とも言えるのです。

地縁、血縁が減った代わりに、いろいろな趣味や関心とか、社会的立場、自分が被った不幸を媒介にして集まる団体が生まれてきます。これをよくみると、趣味なり関心なりを第一義にするかのように見えて、本当はそこでやりとりされる人間関係が実は第一義なのではないか、と思います。しかし、そういう団体というのは、それぞれ目的を掲げているが故に、人間関係を求めているということがわかりにくい。そういう意味ではエンカウンター・グループは、そういう目標なしで人間関係そのものに焦点を当てているという意味で、私たちの欲求を正確に反映していると思っています。

それでは、地縁、血縁でない新たな集団で一体何をしようとしているのか。さきほど、これから私たちは膨大な自由時間に直面させられる時代を迎えると話しましたが、時間を使うときにどのように時間を使ったらいいかという基準がない場合には、自分が表現して相手から反応をもらったときに初めて「自分は納得のいく時間を使っているんだな」という確認を自分自身ができる。そうした集団では、何かをもらうだけでは不十分で、自分が表現できなければならない。表現する場が確保されていないといけない。そして、その表現に対して適切な反応が返ってこないといけない。そういうときに初めて私たちは自分探しができるし、自分の時間を使ったという感覚をもてる。

都留さんが『エンカウンター・グループ』のなかで「アプリシェート」（承認する）する機能、お互いに人間にはそれほど差がないけれども、その小さな違いを見つけだしてそれを褒めたたえる、認め合うという機能がエンカウンター・グループの大きな機能である、と言ってます。表現し、それに反応をもらい、そこにある個性を認めていくということが、これからの時代を生きていくためには欠かせない栄養剤というか肥料に近いものになると思います。その性質を的確にとり入れているという意味で、エンカウンター・グループはこれ

からの時代の特徴をうまく反映しているし、十数年のムーブメントで終わらずに多分生き残っていけるだろう、と思います。私は、この集団的性質を「社会的居間」と表現できるのではないかと考えています。

最後に、この概念化から私のファシリテーションに与えた影響を話したいと思います。私は、次々と出てくる新しい技法に関心がないわけではないのですが、エンカウンター・グループのムーブメントを支えた要素を検討してみて、やはりベーシック・エンカウンター・グループには根源的な力や意味をもっていることを改めて認識できて、これからあまり他のものに目移りしないだろう、と思います。これが一点目です。

2点目に、エンカウンター・グループの余暇としての機能の再発見と成長、強迫からの解放です。これまでエンカウンター・グループの説明は、人間関係の改善と個人的成長という文脈で言われていました。エンカウンター・グループに出ると、対人関係が流暢になって、人間的に成長しないといけないみたいなものがあつたのです。今回まとめてみて、エンカウンター・グループの意義として必ずしも対人関係の改善とか成長という文脈はあまり強くなかった。それよりも充実した時間を過ごすとか、ゆっくりとした探求とか、人と人とのかわわりを楽しむとか、表現しその反応を楽しむとか、むしろ、楽しむという文脈が出てきました。こちらの方が十数年の経験にピッタリきます。

肯定的な意味で、エンカウンター・グループというのは、これからの余暇の中核的性質を含んでいるのではないかとということです。今後いろいろな集団ができていろいろなバリエーションはあると思いますが、その中核にエンカウンター的な性質が含まれるようになるのではないかと。そういう本質的な意味をエンカウンター・グループはもっていて、しかもそれは余暇という機能ではないかと思っています。この性質は「充実した無為」というパラドキシカルな表現がふさわしいのではないかと考えています。私自身が10年間忙しいカウンセラーという仕事を燃え尽きずにやってこられたのも、時々参加するエンカウンター・グループが私を支えてくれた、と思います。みずみずしい40代を迎えられたのも、まずまず創造的な状態でいられるのも、エンカウンター・グループが創造性を高めてくれるような余暇だったからだ、と思います。これが三番目で

す。

それから四番目には、グループを楽しむようになったことがあげられます。見つかるか見つからないかよりも、とにかく模索を楽しむ。模索というのは、集団の中で自分の感じたことを表明し人から反応をもらうというのを手がかりにしながら進んでいくのですが、それを楽しみながらやっていく、というようにいろいろなことが渾然一体となって、結果として僕自身が強迫性から解放されたことが非常によかった。エンカウンター・グループに限らず、どう生きるかというのはしんどいものですが、それでも以前より生活の中に楽しむという要素が大きくなったように思います。先の時間消費型の余暇の機能と合わせて考えると、エンカウンター・グループは新しい時代の「道楽」になるのかもしれない、と考えています。そして、グループのファシリテーションにおいても、セッション数を減らして自由時間を増やしたりして、楽しむものとしての位置づけが大きくなっています。

まとめて言えば、エンカウンター・グループというのは、時代の流れを先取りしていた、まさに来るべき社会の特徴を沢山含んでいた。それ故に、今の社会から次の社会へなかなかうまく移行していけない人たちにとっての橋渡しになっているし、単に橋渡しになるだけではなく、次の時代の対人関係のあり方、組織の運営のしかた、そういったものの「モデル」を示してくれていた。

そういう意味でエンカウンター・グループは、70年代のムーブメントが止まることなく、社会の変動の核心を捉えた運動として命脈を保ち続けるだろう、という確信を得られたということです。

【永原】

それでは、小柳さんに対する質問でも、触発されたことでも、また、考えていらっしゃるようなことでも、自由にご発言願いたいと思います。

【見藤】

強迫的という概念は非常におもしろいと思って聞いていましたが、私は緊張と捉えていたのです。強迫と緊張というのはかなり近いけれど、どこが違うか後で考えようと思いました。

このエンカウンター・グループが非常に大事だというのは、小柳さんが最初に病的と捉えらるおっしゃったのですが、この社会全体が孤立無縁的社会だからこそ価値があるのではないか。だから、極論すれば社会がそうでなくなったら、あまり価値がなくなってしまうかもしれないと考えています。今の社会にないものをやっているからこそ意味があるわけで、社会全体がエンカウナターの的なになれば、逆に効率を重視する社会、効率こそ重要だという考えが出てくるだろう、と思いながら聴いていました。エンカウンター・グループの意味というのは、この社会だからあると思うのですが、。。。。。

【小柳】

現代社会だからこそエンカウンター・グループは意義がある、「こういう社会でこんな点が悪いから、それを变えるものとしてエンカウンター・グループがある」という報告はたくさんあるのです。私もエンカウンター・グループは「こういう社会がいい」というひとつの表現だと思う。それが現実の社会の流れのなかで、力をもちうるものになり得るのか、なり得ないのかということを考えてかったのです。僕は、エンカウンター・グループはむしろ未来の社会の性質を先取りしたものであり、かなり高い確率で実際になり得そうだ、ということを示したかったのです。

時代の流れにうまく合っていないものは、どんなに理想的なものであってもつぶれていくわけです。僕は、エンカウンター・グループは単に理想主義的なものなのか、歴史の検証に耐え得るものなのかというところに一番関心があって、どうやら耐え得るものであって、単に私たちは夢を追っているのではない、ということをお願いしたいのです。

【見藤】

私はそのことに対してはあまりそうなるという感じがしない。その辺はちょっと違うかもしれない。

【畠瀬（稔）】

私は、エンカウンター・グループというのが小柳さんのおっしゃるように、将来的なこれからも続ける意味を十分有していると思う。

それは、真実さとか、一致というロジャースが言ってること、あるいは、孤

独からの解放とか、結局現代社会が、形式性とか強迫性もそうだろうけれど、ありのままでおれないというか、自分らしさを出せないというか、何か仮面をかぶって格好よくしていないといけなくさせている。そうではなく、もっと本当に自分自身ありのままでいれるというか、そういう意味を見出している。そして、それがグループのなかで本当に魅力が高いとか低いとか、競争ということ捨てて触れ合える、というところにエンカウンター・グループの一番大きな意味があるのではないかと考えている。それは小柳さんの文脈のなかではどこに入るのか。

【小柳】

それは、エンカウンター・グループの効率を高めない、目的の不明確さのところに入ると思う。ゆったりした時間や曖昧さのなかでの自分探しが、グループのなかでその時だけ味わって終わるものなのか、それともこの性質はこれからの社会のなかに根づいていくものなのかということを検討したかったのです。仮面をつくらなくて生きていきたいというのは、いつの時代も理想としてそういう思いはあったと思うのです。現代においても単に思いだけで終わるのか、確かに社会のなかでそうした方向で実現していくものなのかということですね。今回社会的意義という形でまとめてみて、僕はかなり根づく可能性があることを証明したいと考えています。

【畠瀬（稔）】

いまおっしゃることが、言葉としては直接出てきていない。

【小柳】

強迫性の部分で性格構造のことについては触れている。表現と表現に対する反応というところで、孤独からの解放ということについては触れています。ネガティブな表現では使わず、どういう方向へ私たちは向かっているのかというポジティブな表現をなるべく使おう、と今回は心がけました。

【畠瀬（稔）】

それがポジティブな意味をもっているのではないかとと思う。私が住んでいる周囲、地域ではいろいろな規則に縛られて、ありのままでおれない。だから、ありのままでおれるというのに価値がある。それをエンカウンター・グループ

ではやっていけると思う。それは非常にポジティブな意味をもっていて中心的な強調点を与えたい、と私は思う。

【増田】

「曖昧さのなかの自分探し」の容器としてのエンカウンター・グループについて触れていたが、消極的な意味、例えばセラピー的な意味を僕はそこにあまり加えてない。もちろんセラピーのようなことも含まれるが、むしろ教育につながる意味で捉えられるのではないかと思う。

形式陶冶という言葉がありますが、いわば知識をつめこむようなことではなく、その人間自体をひとつの器として見ると、その器を大きくしていくというような面のことですが、いまの教育のなかでは、これが十分考えられていない。実際にどういうようにやるかという方法論もあまりない。私は、エンカウンター・グループはこのような欠けた部分を補うような位置づけの捉え方をしている。これがあると、曖昧な自分を探す、何があるかということを見つけていく、ということができるよう気がする。自分の土台を自分で見つけていく。そのような意味をもっている、と僕は捉えている。

グループ活動を始める時に「何のためにやるのかということをちょっと脇に置いて、とにかくやってみよう」と言って始めることが多いのですが、何かのためにやるということに慣れているから、何のためということが曖昧な状況では、やりにくく戸惑ってしまう場合が多い。しかし、このような戸惑いのなかでそれを続けていくと自分自身の器ということにつながっていき、その器そのものに直面し、その拡大化に結びつく、と思っています。

【大須賀（克）】

おもしろいことに、例えば企業で研修をやるでしょう。そうすると、この研修はすぐには役立たないと言うのですよね。それでは他の研修は役立っているのか、と尋ねたくなるのです。エンカウンター・グループは役立たない言うけれども、社会に戻って一番効果をあげているのです。結局、実際には役立つ、と私は思っているのです。その辺の表現がなかなか難しいですね。一般の人にその辺をもう少し積極的に誤解されないように工夫していく必要があるのかな、と思いました。

【林】

小柳さんが言われたことについては、実はよく伝わってこないのです。私もエンカウンター・グループのなかで、例えば、強迫性からの脱却とか、いい時間を楽しめるとか、お互いに生き生きしたやりとりが人との間にできるというのはすごくわかるのですが、小柳さんが言われたように社会全体の方向として、エンカウンター・グループで目指しているような社会に動いていくと言われますが、そのポジティブな意味が私にはまだピンと来ない。

例えば、ある会社で社員のためにカウンセラーみたいなことをオフィスの一角に机と電話をもらって、周りの雰囲気を感じながらやったことがありました。そうした場にはまだ自分では居にくいような感じがしたり、人と人とのやりとりがすごくパターン化してて、電話をいただくと、「はい、何とかでございます」というようなちょっとオクターブのあがった声を出さざるを得ないのを感じたのです。だから、私はエンカウンターに行くとしごくリフレッシュするのです。けども小柳さんは「いやそういうのではなくて、社会の流れとしてはこういう方向に進んでくる」と言われるのですけれど、そこがもうひとつ私にはピンと来ない。その根拠をもう少し教えていただきたいと思うのです。

【小柳】

その根拠を考えるのが今回の発表の目的でもあるのです。今回表現した以上には、いま言葉にできません。少し時間を貸して欲しい。

【畠瀬（稔）】

林さんの質問はかなり難しいと思うのですね。だけど、小柳さんがみずみずしい40歳と言われましたね。そのこと自体が本当に偉大なことだと思う。私自身はやはり男性中心の頭の固い融通のきかない、権威的でいばりたい男たちがこの社会をかなり悪くしていると思う。これは、もう明確に見えてきていると思う。そうしたなかで、みずみずしい40歳と言える人がいるということは、本当に画期的なことだと思うのです。そして、小柳さん自身がこの方向が必ず歴史のなかで役立っていくだろう、というように体で感じておられますよね。そういうことが何よりも根拠を示しているのではないかと思います。林さ

んの質問と関係するかどうかわからないけれども、小柳さん自身のそのような実感がある限り本当にこの社会で役立っていくだろう、と思います。そのみずみずしさはどこで感じるのかということは、簡単に答えられることじゃないと思いますが、もう少しそのみずみずしさを表現していただけたらありがたいと思う。

【小柳】

エンカウンター・グループは、自分を創りあげられるというか、自分のために時間をたっぷり使って自分を創るというか、そのような面がありますね。でも日常生活のなかでは、自分を創るという時間が確保しにくいですね。外形はがっちりできるのですが、中身をつめる時間というのは少なく、林さんはそういう社会が続くのではないかと言うけれど、僕は、そういう生き方はいつかエネルギーが低下して続かなくなるのではないかと思います。だから、エンカウンター・グループをやっている人たちがずっとみずみずしくいる、ということが重要なことだと思います。いまの生き方の社会のままで立ち行かなくなる、という呻きみたいなものが聞こえてくるように思っています。

【鈴木】

みずみずしさに関係があることなのですが、「いまここで」という「いま」というのは何か、いつも思うのです。これはいま思いついたことなのですが、エンカウンター・グループでの「自分探し」は、隣の人との関係とか、いまここでの関係とか、横だけの関係ではないように思うのです。みずみずしさと関連することとして、「いま」というのは、この「いま」の時間という意味での「いま」だけではなくて、自分の生まれたときの、大袈裟に言えば一番意識できる限りの以前に立ち返って、40歳だったら40の、50歳だったら50のみずみずしさを取り戻すことが特徴なのかな、と思ったのです。エンカウンター・グループの「いま」は、そういう「いま」なのではないかなというように直感的にいま思っています。

【木村】

時間の消費について、僕自身は、生命というのはそういう性質のものだ、と思うのです。生きる目的が出てくるというのは、死なないための何かみたい

なものです。人間の遊ぶということについて言えば、子どものやっていることは全部無目的というか楽しいからやっているの、脱産業化社会になるから人間や子どもがそうなるのではなくて、人間というのはもともとそういう性質をもっていると思うのです。鈴木さんが言われたことに立ち戻ると、人には必ずその人らしいみずみずしいものがあるのであって、脱産業化社会になってそこで新しい人間が必要になってくるから、それで今までの強迫性格が適応的ではなくなってくるからとか、新しい人間が必要になってくるからという理由とは思えない。

目的自体を探していくのが脱産業化社会であるとのことですが、「脱産業化社会はこうなる」というような予測が次の段階を決めていくような感じですね。だから、それに合わせた人間が必要になるのではないかな。これからどういう社会になっていくかという予測にしても、必ずしも僕らに生きやすい社会になるかどうかはわからない。時間が有り余ってその使い方がどうなっていくかわからないというようなことについても常にそういう部分があるから、脱産業社会化論も援用してその枠組みのなかで考えるというのは、エンカウンター・グループの非効率性とか、あるいは、目的追求的ではないという捉え方が僕のなかではしっくりこない感じがあるのです。大きな枠組みをもってきても楽観的にはいかないのではないかと．．．．。

【小柳】

死ぬまでの時間をどう使うか、それが人間の生き方そのものなのですからけれども、200年間続いた産業化社会では、そういう生き方でない生き方を強いられてきたように思います。人間には根源的な目的があって、それは効率的に達成した方がいいという生き方にすりかえられていた、と感じています。

【永原】

小柳さんの発表はこれで区切りをつけたいと思います。これは本質的なテーマですので、次の発表のセッションでさらに深めていくことになるのではないかと思います。

〈休憩〉

プレゼンテーション 2 林もも子

【永原】

予定は3本立てでしたが、急遽2本立てに変更しました。林さんは、エンカウンター・グループを正面から研究テーマに選んで、新しい世代の重厚な研究者です。林さんもエンカウンター・グループの実践家とか研究者という人たちのもっているいろいろな問題をきちんと採りあげて、専門的に研究していかなければならないのではないかと、ということをもずっと前から提起しておられます。林さんの研究にいろいろな形で協力された先生方もおられるようなので、そういう意味からも『いま』ということでは是非研究発表をしていただきたい、と思って強引にお願いすることになりました。よろしくお願いします。

【林】

林です。よろしくお願いします。私は大学院に入る1年前に初めてメンバーとしてグループ体験をしてから、エンカウンター・グループに非常に惹かれて、修士論文はエンカウンター・グループをやるしかない、というような感じで修士の2年間で過ごしました。ここにいらっしゃる皆さまにもご協力いただいて本当にありがたいと思っています。

『コ・ファシリテーター関係の問題』というのをとりあげて研究をしました。その研究結果のフィードバックも兼ねて話して欲しいと言われたのですが、いろいろなところで公にしている部分もありますので、読んでいただいている方もあると思います。重ねてお話しするのもおもしろくないので、書いた部分については簡単にこんな感じのことをやりましたということに触れるだけにしておきます。その修論で書いたのですが、書いたのは1986年で、その頃はまだグループのファシリテーターを10指に満たない数しかやっていなかったのです。それからわずかながら経験を重ねているので、いまの私の言葉で書き直したところを発表させていただきたいと思います。

私にとっては自分がファシリテーターをやっていく、グループをやっていく

うえで未だに克服できないでいる問題でもあって、自分のためにこの研究をやっているという部分もありますので、皆さんからいろいろなフィードバックを頂けたら嬉しいと思っています。

まず方法論ですけれども、修士論文を書くにあたって、私の大学では事例研究というのはまだ経験が浅いから、研究として認めるに値するだけの研究はできないだろうというのがありまして、事例研究は認めてもらえなかったのですね。かといって仮説検証的な実証的な研究、従来のような科学的心理学のような枠組みの研究というのは私にとっては生きたデータをレントゲンに写してある部分だけ見るとか、あるいは、ある断面をスライスして切り取るというように感じて、面白くないというのがありまして、もう少し面白いこと、やりたいことをやれる研究方法がないかと模索して、自分で無我夢中のうちにつくりだした方法論ですけれども、探索的研究方法と勝手に名前をつけてまとめました。

これは、事例報告的なデータを得るために、自由記述で答えてもらう部分がたくさんあって、「一体何が起きたんでしょうか。あなたはそこでどういうことをお感じになりましたか」というような私が聞きたいことをダイレクトに聞いていくもので、項目に○×で答えていただくのではなくて、自分で生の言葉で答えていただく、というようなデータを集めさせていただいたのです。そのようなものを集めるのにどう集めるかというのにまた苦心して、KJ法というのがありますけれども、それをヒントにして、カードをいろいろ使って、仮説検証というよりは、私はグループのファシリテーターの経験は少ないわけですから、もう少しいろいろな方の知恵をいただくという意味で、仮説を対策的に発見していくような方法ということでやりました。これは客観性とか、再現性というような意味では、科学的研究方法としては劣ると言われるだろうと思うのですけれども、人間関係という生きている非常に複雑な事象に関わる方法としては、その実践的なことを知りたいという目的からは妥当なものではないか、ということを主張しようと思って書きました。

次に、これが一番最後に資料として添付した部分でもあるのですが、村山先生と野島先生が『エンカウンター・グループの発展段階仮説』というのを書い

ていらっしゃるんですけども、それに基づいて尺度を作りまして、それが『グループ発展段階尺度』という数字が1～7まで並んでいるものです。これを使ってこの信頼性と妥当性の検討をしました。それを使ってやってみて、いままでのグループの研究に用いる尺度というのが、信頼性とか妥当性の検討をされている尺度というのが少ないという点では意味があることをやったのではないかと、と思っています。そして、これを使ってコ・ファシリテーター関係のあり方の重要性を論じました。ここまでのほぼ公刊された論文で私が書いている研究の部分です。

そこで、まだ発表していないところを話させていただきたいと思います。

まず、なぜ私がコ・ファシリテーター関係に興味をもったかと言いますと、もともと私が一番最初にメンバーとして体験したグループは非常によかったのですけれど、二番目に経験したメンバー経験と自分の初めてのファシリテーター経験で、よくわからないけれども何かうまくいっていないコ・ファシリテーター関係があったのです。私にとって、もともとエンカウンターグループの体験というのは、何かしみじみとよかったり、胸が踊るような体験だったり、自分が生きていてよかったなあとか、この人たちと会えてよかったなあと感じるような感じのものだったのですけれども、この2つのグループというのは何かが違う、こんなはずではないのに、というとても違和感があるすっきりしない体験だったのです。

私にとっては、きつい体験というのはきつくてもはっきりわかればいい体験になる、という感じはあるのですけれど、よくわからないモヤモヤしながら残る、引きずるというような体験は私にとっては悪いということになってしまうのですけれど、何かこんなのでありたくないというのがありまして、そういう感覚が私の研究の出発点になっています。ですから、私がいま研究を細々と続けているのは、せっきくエンカウンター・グループをやるのならいい体験をみんなでしたい、ということが目的になっています。

コ・ファシリテーター関係のなかで、何かを工夫したらこういうことは防げるのではないかという思いで、そのような実践的な知恵みたいなものを得たい、ということをお願いしながらやっています。今日これからお話しするのは、そ

こで得た知見というか、私がとくに重要だと思っている点をお話ししたいと思います。以下のことは、自由記述を主にした質問紙ですとか、直接私がファシリテーターの方々にうまくいったファシリテーター関係の事例をお訊きして集めたデータに基づいて言っていることです。

まず、うまくいかなかったファシリテーター関係というのは、ファシリテーターの純粹さを妨げる、それがプロセスのなかに不透明さというか滞りみたいなものをつくる、ということがあります。これは重大なマイナスの影響をグループに及ぼす、というように考えています。もちろん、コ・ファシリテーター関係がうまくいかないという感情的な苛立ちや落ち込みもあるのですが、そういう否定的な気持ちというのはグループ・プロセスのなかで一時的に起きてくるということ自体はよくあることだろうと思うのです。けれども、その時にファシリテーターが純粹であるとか、真実であるということができていれば、あるいは、自分のなかに起きている気持ちとか、体験過程が十分開かれていれば、そういう否定的な感情は、コ・ファシリテーターに対してに限らず、メンバーに対してとか、グループに対してとか、あるいは、自分に対して起きることがあると思うのですけれども、それを表現することができたり、しばらく寝かしておいたり、あるいは、ちょっとつついてみたり、何らかの対処ができると思うのです。だからそうやって自分の中の嫌な感情みたいなものに取り組んでいるファシリテーターの姿というのは、苦しそうだったり、行き詰まっていたりということはあるかも知れないのですけれども、そのファシリテーターが自分の体験過程に開かれている限りは、その姿というのはメンバーに何らかの形できちんと見える、という意味で透明だと言えるのではないかと思います。

そして、そういうものはグループ・プロセスのひとつとして、グループが流れていくなかで何らかの形で扱われることができると思います。もちろんファシリテーターがイライラとか落ち込みとかがなくて、安定していられるというのは、それはそのグループの心理的安全の風土とよく言われますけれど、それを培うのに大いに貢献できると思います。うまくいってるコ・ファシリテーター関係にはしばしばそのような効果があったというお話があったのですけれど

ども、だからといってファシリテーターが心理的に不安定になることがグループにマイナスであるというようには私は考えていなくて、そのファシリテーターが自分が「なんかおかしいな」とか「揺れてるな」ということに直面できない程度に不安定になるということが、グループの他のメンバーにとっては、わけがわからないとか、モヤモヤしたとか、なんか変な感じというのを引き起こすのではないかというように思っています。そういう不透明さが、グループ・プロセスを滞らせてしまうのではないか、というように思っています。

私は去年の夏、コ・ファシリテーターの研究をしていながら、その一番恐れていた最悪の事態を経験しまして、「こんなにうまくいかないことがやっぱりあるんだな」と、その事例を今ある方につきあって頂いてゆっくり見直しているのです。

それから、自分の体験過程に開かれていることができないほど揺さぶられているというのとは別に、ファシリテーターとしての役割意識というのがあると思います。ファシリテーターとしては、グループの利益を優先するという感じで、コ・ファシリテーター関係の葛藤は敢えて扱わずに、コ・ファシリテーターもメンバーであるというようにみなして、自分一人の力でカバーしてグループをすすめていく、ということがよくあったのです。このような場合は、回答者の方々は「メンバーは、コ・ファシリテーター関係は感じていなかっただろう」というようにおっしゃっているのですが、そういう場合には、コ・ファシリテーター関係がうまくいかなかったグループということで、例えば相互作用があまりなかったとか、いろいろなグループへの効果のようなことが尺度の方へ出てくるのですが、おそらくそのファシリテーター同士がどこか触れ合わない関係であって、それはどこかグループのメンバー同士の間でも関わりの薄さのようなものをもたらすのではないか、というように思っています。

それからファシリテーターが自分のなかでコ・ファシリテーターに対する感情を閉じたり止めてしまったりするわけですから、いくらメンバーに対して開かれていても、コ・ファシリテーターもグループの一員なわけですから、そのなかの一人に対して閉じたり止めてしまうという部分が出てくるのではな

いか、というように思っています。

ですから私は、コ・ファシリテーターを非促進的であるというようにバサッと切り捨てること自体が、切ってあきらめてしまうこと自体が非促進的なことなのではないか、というように思っていて、むしろファシリテーターとしての役割意識というのを離れて、コ・ファシリテーターもメンバーの一人であるということととことんグループのなかに関わりあうことができた方が、みんなが成長するグループ体験になるのではないか、というように思っています。

コ・ファシリテーター関係がうまくいった場合をまとめてみると、個として自立した人間同士が、共同してやっていく信頼関係ができたときである、というようなことがいえるのではないかと思います。逆に、コ・ファシリテーター関係がうまくいかなかった場合というのは、個として自立していない場合が多いですし、個として自立するということが普段できていてもできない状況に置かれるようなところもあると思うのですが、そういう場合が多いのではないかと自分も含めて思っています。

例えばキャリアというのは、コ・ファシリテーター関係では若いうちだけ問題になるのか、と思って調べたのですけれども、統計的に差はなかった。けれども初心者は、明らかに有意にコ・ファシリテーター関係にひっかかる場合が多くて、初めての経験でうまくいかなかったという人が意外に多かったのです。これはどうしても、最初というのは依存性が出てくるのではないかと思います。そういうことがひっかかってくるのではないかということと、初心者でなくても個として自立した存在として相手があるがままに観ることができなくて、何となく暗黙のうちにファシリテーターというのはこういうようなものであるという自分の固定したイメージをもってしまって、それを相手に押しつけてしまい、そのイメージと食い違ってしまうコ・ファシリテーターに対して理解できないとか、イライラするとか、不安になるというような問題が起きることがあるのではないかと、思っています。

これは私の見方ですけれども、一見うまくいっているように本人たちが感じているコ・ファシリテーター関係でも、実はもしかしたら依存し依存されている関係が馴れ合いとして安定しているような場合もあるのではないかと、いう

ように思うことがあります。これは、私が例えば一緒に仲間としてスタッフをやっている横で見て思うことですけれども、長年一緒にグループを行ってきた仲間ですと、自然にファシリテーターイメージというのをグループのなかでこの人はこういう感じで動くとか、「まあこういう感じなんだよな」というのを何となく共有しているから齟齬は生じないのだけれども、何となく一緒にいたいなところで動いていて、実は各人の個性が十分発揮されていないというようなことも、もしかしたら起きているのかもしれないと思っています。この個としての自立というのは私にとっては非常に大きな課題なのですけれども、逆にそれを無理に達成しようとしても、かえって関係が不自然な、非生産的なものになることもあると思います。

例えば、依存したい気持ちを否定して背伸びをして突っ張ってギクシャクするとか、依存してくる相手を「自立しろ」という感じでバサッと切って谷底に突き落としてしまってその人が落ちこんでしまった、というようなこともあります。あるいは、馴れ合いになってはいけないというので、無理に肩肘はって個性を強調しようとし過ぎて、なにか競争関係とかリーダーシップ争いになってしまうようなこともあまり望ましくないことなのではないか、とも思っています。個としての自立という意味での孤立というのを十分達成していない、いわば発展途上のファシリテーターというのは、少ないかもしれないと思うのですけれども、その達成というのはやはり個人の成長課題だと思います。

けれども、ファシリテーターとしてグループに臨む際に、個人の未解決の成長課題がなければいいかというと、人間である限り未解決の問題が全くないということはないのではないかと、ということを最近思っています。例えば孤立ということだけではなくて、異性とペアーを組むこととか、父親的な関係とか、細かい個人的なコンプレックスというべき種類の問題をほとんどもたないという方もいらっしゃるかもしれないけれども、だいたい皆何かを抱えているのではないかと思っていて、たまたまファシリテーター関係においてそういう未解決の個人的な課題が表に出てくることがあっても不思議はないのではないかと思います。

そのような課題が表面化しないで済むのは運がいい、ということだったかも

しれない。その際にファシリテーター関係をこじらせ、それが出てきたというところで、こじれるか、あるいは、何とかうまく乗り越えるかというところで、必要なのはやはり自分はファシリテーターだから個人的な未解決な課題が出てきたら困るとか、相手に出てきたら困るという視点は捨てて、グループに入ったら個人として自分も相手もそういうものとして向き合う姿勢が必要なのではないかと考えています。

未解決の個人的な課題が表面化してきた場合は、ファシリテーターとしての機能が一時的に妨げられるということは起きてくると思うのですが、そこで「あいつは何だ」とか、「自分は」という感じでファシリテーターとして機能麻痺になっている相手や自分を責めるのではなく、個人としてみて相手や自分は何に引っかかっているのだろう、と見つめる姿勢が必要なのではないかと考えています。例えば、人に頼りたい若者としてとか、人にものを教えたがる先生だとか、競争心を燃やしてる自分が出てきたとか、異性が苦手な自分とか、相手が出てきたな、というような感じで見ればファシリテーターの問題としてではなくて、個人の問題として観ることができて、その問題を相手との間で表現して共有したり、あるいは、自分の中にとりいれたりということができないのではないかと考えています。

それから、その未解決の個人的な課題の表面化という問題とは別に、ファシリテーターとしてキャリアに差があるということ自体がコ・ファシリテーター関係において問題になる、ということもあると思います。「若手ファシリテーター養成のためベテランと組んでみましょう」ということはよく行われているようなのですが、その際にやはり責任の把握ということで思い込み、コ・ファシリテーターは基本的に対等であるべきであるとか、逆に、相手の個性を活かすべきであるとか、あるいは、教えてもらおうとか教えようとかいう姿勢があると、それが窮屈さとかイライラをもたらすこともあると思います。だから教えよう、教えてもらおうと一緒に組めばいいのですけれども、教えようというのといや対等にやろうという人が組むと、イライラやがっかりということが起きてくるので、お互い相手にどの程度何を期待するかということについて食い違いが出てくると葛藤が起きてくるのではないかと考えています。

それから、キャリアの差ということとは別に、オリエンテーションが違うとかグループ観がすごく違うという場合にも、ファシリテーターとして相手に暗黙のうちに期待しているものが食い違って葛藤が生じるということがあるようです。こういう葛藤は、相手に対する期待と実際の相手とが食い違うところからくる認知的不協和のようなものではないかと思うのですけれども、この場合単純に考えれば、食い違いに気がついて自分の期待を実際の相手に即して修正すれば、葛藤は解決すると考えられるのですけれども、実際にはそうはいかなくて、やはり自分の期待にこだわって相手がおかしいとか、あるいは、自分が間違っているのではないかということでもだかまっていくのではないかと思います。コ・ファシリテーター関係で何かの葛藤が生じた場合、お互いの率直な気持ちを話し合えるかどうかということが葛藤解決の鍵になるのではないかと、と思っています。

そこで、その考えとか相手に対する見方とか「かくあるべき論」のようなことをやっても平行線でしかない。「いまちょっとあなたのああいう感じで私は落ちこんでいる」とか「嫌な感じが残っている」とか、そういうことが言えるかどうかということが鍵になるようです。けれども、話し合うというのをグループのうちで行うか、休み時間に行うか、あるいは、いつどのタイミングで行うか、二人でやれるかそれとも第三者を交えてやるかということは、ケースバイケースでどれがいいとは言えないようです。グループについての考え方の違いを反映しているようで、グループセッションのなかのことはコ・ファシリテーター関係であろうが何であろうが全部セッションのなかでやるんだという考えの方もいらっしゃいましたし、あるいは逆に、これはファシリテーターとしての役割をかなり意識している人たちだと思いますけれども、外で処理してから中に入ります、というような人たちもいました。

私がインタビューさせて頂いたベテランと呼ばれるコ・ファシリテーターの方々は、だいたいそのグループのメンバーとか、コ・ファシリテーター関係とか、プロセスとかをみて、「暗黙」という言葉を使われるのですけれども、適切なタイミングと場でそういう話し合いの場をもっているようです。そうするとうまくいくとおっしゃるのですけれども、私はどうもこの点についてまだ勘

が身についていなくて、こうやってコ・ファシリテーター関係の葛藤が乗り越えられました、と胸を張って言える事例があまりありません。ただうまくいかなかったという経験はいくつかあります。

ここで重要なのは、その話し合いができるだけの基礎としての信頼関係をつくる、ということを意識していることがとても大切だと思います。信頼関係をつくるというのは、それができる場合は自然にいつの間にかできるものだと思うのですが、なかなか簡単でないときもある、と思っています。とくに、いままで全く顔も見たこともない、会ったこともない、というような人といきなりコ・ファシリテーター関係を組まされたという初顔合わせの場合には、わからないという相手を信じるにはかなりの度量が必要なのではないか、という感じがします。これも少し統計的に差が出たのですが、グループのメンバーとファシリテーターだったり、同じグループであったり、知っていた人と組んだときと、全く知らない人と組んだときとでは、やはり知らない人と組んだときにコ・ファシリテーター関係がうまくいかなかった、ということが多いようです。これは、相性といわれるものかも知れませんが、第一印象で苦手意識をもったり、徐々に積み重なってうまくいかないということもあるようです。ですから、私はできれば全く知らない相手と組むということは避けた方がいいのではないか、と思っています。

それからもうひとつ、構成的なグループではスタッフの側の個人的な問題が突きつけられるということは起こらずにやれるかなと思います。私は構成的なグループをやったことがないのですが、非構成の場合、グループにメンバーの一員として、一人の人間として参加するということは自分をさらすというか、投げ出すというか、そのような感情を私はもってしまっていて、いつ何が突きつけられるかわからない、何が自分のなかから出てくるかわからない、それがおもしろさでもあるのですが、きついところでもあるのではないかなと思うのです。それがコ・ファシリテーターとの間で出てきた時は、とくに私はきつい感じをもって、そういうきつさをもちながらグループの旅を共にするということは、かなりハードな作業だと思っています。

ですから最初に一緒にやっていくという覚悟みたいなものができていない場

合には、どうしても何かの障害にぶつかったときに相手を責めてしまったり、切り捨てたりということが起きかねないのではないかと考えています。コ・ファシリテーターとの組み合わせということだけではなくて、共に歩む覚悟は、グループの皆と一緒にスタートしたときにもつべきものだと思うのですけれども、コ・ファシリテーターの組み合わせを決めるのは、だいたいにおいてスタッフ・グループのなかで話し合っただけで決めるわけですから、その時に「やろう」という感じというか、この人と組みたいというファシリテーターの意志の尊重というのが非常に大切だと思います。

と言いますのは、うまくいかなかった事例に、オーガナイザーから押しつけて決められてしまったとか、行ったら決まっていた、というような事例がいくつかあって、そのモヤモヤがあったまま始めてしまうと何かが起きたときに諦めてしまうとか、嫌になってしまう、ということが起きてしまうのではないかと考えています。

それからもうひとつ、一見すごく些細なことに見えるかもしれませんが、ファシリテーターがグループの期間中とか準備のための事前ミーティングも含めて、欠席せずに皆が顔を合わせられるという条件を整える、という物理的な環境調整も非常に大切なのではないかと考えています。それは、皆で決める時もそうだし、自分も欠席しないということがとても大切なのではないかと最近とくに感じています。セッションの外枠作り、例えばメンバー分けとか、場所や部屋はどうしようかというようなことを初めから一緒にやっているということで、自然に相互のグループ観の理解とか、お互いの人間性がわかるとか、信頼関係のようなものができてくるところがあるのではないかと考えています。

それから、コ・ファシリテーター関係が問題になることがあるということ自体を意識していないということが問題になっている、ということもあるような気がします。しかし、その葛藤がこじれてこじれて修復にものすごく大きなエネルギーを費やさなければならぬほど大きくなる前に何とかしようとするには、自分がひっかかっているのは、コ・ファシリテーター関係のところ、ひっかかっているのかもしれない、ということを頭の隅に置いておくということも必要なのではないかと考えています。

以上が私が、修論のために集めたデータとか、自分の経験からいま考えていることですが、いま私が研究として行っているのは、修論の続きで『エンカウンター・グループの発展段階尺度の妥当性』です。その当時はファシリテーターの方々にやっていただいただけだったので、その後、メンバーの体験と突き合わせをしてみようかと思い、グループ体験についてのアンケートをメンバーの方々に配ってやって頂いて、それとファシリテーターの方には同時にグループ発展段階尺度をつけていただいて突き合わせをしよう、ということをはつぽつと始めています。メンバーの体験というのは、『やさしい集団精神療法入門』に出ている質問紙を使っています。エンカウンターにこの尺度を使うことにはお叱りをうけるかもしれませんが、私は今一般的に使われているもののなかで体験を深めるのにはいいかな、と思ったのです。

それからもうひとつ今やっていることは、コ・ファシリテーター関係のあり方についての事例に即した実践への示唆のようなことをもう少しきちんとまとめたいと思ひまして、ここ数年やってきたコ・ファシリテーター関係の事例を振り返るという作業をはつぽつやっています。

私は東京の方でエンカウンター・グループの事例を発表して勉強会をやっています、そこで発表したものを振り返ってもう少しきちんとした形にしたいということと、それから一部は去年の人間性心理学会自主企画で話をしたのですが、いろいろな主催団体や主催者の方の間でやっているスタッフ・グループのあり方はいろいろだと非常に感じまして、その個性というか、メリット、デメリットということを私自身も一緒になって主催者ということでグループをつくってやったりもし始めているので、その辺のことを少しまとめてみたいと思っています。

私は、以前はコ・ファシリテーター関係の問題の認識がもうちょっと必要だということを切実に思っていたのですが、最近はコ・ファシリテーター関係はスタッフ・チームのひとつだという感じがあって、スタッフ・チーム全体のチームづくりのようなものが非常に重要である、と思っています。

【永原】

われわれはファシリテーターを経験しているので、実際問題としていろいろなコ・ファシリテーター関係を経験していると思います。この問題は、いま言われたように、一人ひとりがいろいろな思いで聞かざるを得ない、さまざまなものが湧いてきたような、湧きたたせないようないろいろな思いがあるでしょうが、それぞれ自由にご発言をお願いしたいと思います。

【増田】

5枚目の一番下の所に「できれば全く知らない相手と組んでグループを行うことは避けた方がよいのではないか」ということが書かれているけれども、僕は知らない相手と組んでみるのもおもしろい、と思っているものだから、できれば、逆なのですが、。。。。。

【林】

「この人はちょっと」というところが、やはり人間だからあると思うのですね。誰とでもやってみたらいい経験になる、というように言えるとは思いますが、すけれども、「やってみたいな」とか「やりたくないな」という感じというのが大事だと思います。条件つきで言えば、できれば「ちょっとこの人苦手かな」とか「やりにくいな」と思う人で、かつ知らない人であるなら避けた方が無難かもしれないということです。

【増田】

ペアづくりをするときに、何か気の進まないような気持ちが自分のなかにあったり、知ってる知らないということも含めてどうもよくわからない、それに加えて気が進まないという場合でも、やってみるとまた違うようなことが起こってきたりすることもあるのですよね。

それと、たまたまですけれども、箱根で学生のグループをやって、男性ファシリテーター、女性ファシリテーターということになったのですけれども、この点に関してはどうでしょうか。

【林】

経験的には確か畠瀬直子先生でしたか、他にも何人かの方が書いていらしたと思うのですが、異質の組み合わせがあった方がおもしろい、ということによ

く言われるのですけれども、コ・ファシリテーター関係がうまくいかないという点に関しては、統計的には同性の組み合わせの方がうまくいくとか異性の方がうまくいくとか、ということにはなかった。だから私は、同性か異性かという問題よりも、やはり個人的なその人との相性みたいなものが大きいのかな、と思っているのですけれども．．．．．。

【増田】

コ・ファシリテーター関係の問題というのは、単にコ・ファシリテーター関係の問題だけではなくて、グループ自体の問題にもなっていますね。そうするとグループのメンバーとしてみて、そのメンバーもいろいろな捉え方や受けとり方があるでしょうけれども、やはり女性だけのファシリテーター、あるいは、男性だけだったらどうなのかな、とまだ気になっています。

これは、体験的にやってみて、後でも結構ですが、さらに検討してみたいですね。

【林】

例えば女性のファシリテーターだからこういう感じのグループになったと感じるメンバーもいるかもしれませんが、男性だけのファシリテーターだからこういうグループになったというメンバーもいるだろうと思いますし、それもやはりケースバイケースなのではないかと思います。例えば、それが集団精神療法だったり、あるいは、思春期のグループだったりすると、両親像を投影される方がいいから男女のペアの方がいい、というようなことを言いますが、私はエンカウンター・グループというのはそのような意図をもってするものではないと思いますので、女性同士の組み合わせ、あるいは、男性同士の組み合わせ、異性の組み合わせ、というのをその時々「こういう感じでやってみよう」ということで、何かおもしろいことができるのではないかなと思っています。

【増田】

僕は女性でないから、何か感覚的に捉えられない部分もあるわけで、女性ということがファシリテーター同士のことやグループの動きとしてどうなのか、ということがちょっとよくわからないのです。そのところがどうなのか。

【永原】

私の感想ですけれども、ファシリテーター関係もスタッフ・チームづくりのひとつというか、一環として捉えるというのは非常に重要な視点だと思います。というのは、私が現実に行っているコ・ファシリテーター関係というのは、例えば職場の同僚であったり、地域で一緒にやっている人だったりするのです。そうすると、そのスタッフ・チームづくりというのは、普段からのコミュニティなり勤めている職場の精神風土とかがどの程度お互いに安全に活かし合えるような雰囲気があるか、にかかっている。

例えば、人間関係研究会のようにかなり同志的な結束があって年何回か集まってファシリテーターを組むということをしている場合には、ある意味ではそこでオープンにコ・ファシリテーター関係ができており、コ・ファシリテーター関係におけるお互いの確かめ合い、意識化する作業は、いろいろななかから「この人と組みたい」と言ってやるということでもなくとも、だんだんやっているうちにかなり細々としたなかからかなり充実したコ・ファシリテーター関係が積み上げられていくように思います。

生きてる現実の世界は、「自分がこの人と組みたい」というレベルで自分が組んでいけるという側面と、いま現実に行っているところでいろいろなものを抱えながらもそこで相当鍛えられる面があるのではないかと。ですから、普段からのスタッフ・チームづくりという視点のなかにコ・ファシリテーター関係があるという感じです。コ・ファシリテーター関係をぐっと追求していけるような視点を普段からスタッフ・チームづくりといいますか、生きてる世界からの風土づくりのなかでどの程度自分たちがやれているか、ということが検証されていく。このようなことを考えたりしておりました。

【林】

私も普段、職場の関係でエンカウンター・グループをやる場合、コ・ファシリテーターを組んだなかでかなりいろいろなことが起きてきた時に、どこまで言い合えるかという点で、日常の関係が変わるぐらいのことが起きてもいいのではないかと時々思うことがあります。それは、やはりすごく怖いことなのかもしれませんけれども、そのぐらいのことが起きる力をグループはもしかして

たらもっているのかもしれない、と思っています。

【尾崎】

自分自身が体験してきて、コ・ファシリテーター関係という視点では見なかったけれども、自分個人としても対メンバーとしても、自分が透明であるとか、いまどんなことが起こっているか、というのが言えるというのはすごく大事なことで、とくにコ・ファシリテーターとの関係で具体的な例としてうまくいかなかったことを考えてみると、なあなあでこちら同士がわかっていてもそれをメンバーのところへは出さなかったりして、メンバーの方はそれがわからないでその不透明さを感じてイライラして、結果的にそのグループがうまくいかなかった、という体験をしました。

私は、何回か「自分の感じとしてあまりよくないな」というか「いい後味がしないなあ」というのを感じたときに、かなりメンバーの要因が大きいとずっと感じてきたのです。最近難しいメンバーが入ってきてすごく難しいことをするので、対応に苦慮していて他のメンバーも巻き込まれて難しいな、ということはずいぶんあるのだけれども、ファシリテーター同士が自分の感じをその時その場に投げ出せたらもっと違ったかな、と思いながら聞いていたものですから、「ああ、これはいろいろ参考になった」と思いました。

【E】

ひとつ具体的な場面として、去年の清里プログラムの第1日目のコミュニティ・ミーティングを思い出したのです。あのときに私はメンバーとして参加させて頂いたのですが、ファシリテーターの受けもちがまだ決まらなかったり、事前の連絡がうまくいなくて、コミュニティ全体が「どうなっちゃってんだろう」という一種ファシリテーターに対する信頼感がなくなったという感じを私自身メンバーとして参加していて正直ありました。その体験が結局メンバー同士の話し合いのひとつの素材にもなったり、終わりましてからもまだあのときのグループがそこら辺でつながっていて、何かまた別の意味でのいろいろな体験になった、ということを思い出しました。

自分がメンバーとしてはいつているときのグループのことですが、メンバーは、結構ファシリテーター、コ・ファシリテーターがどうかということを見て

る、と思うのです。それで、「Aさんに対する関わり方がこの方とこの方ではちょっと角度が違うな」というような感じの違いとか、うまくいってない感じとかというのは、メンバーの方が敏感に感じているのです。それらは、グループのセッションのなかではどうしても出なくて、後でボショボショと話していたりする方が多いのです。

あるグループで初対面だったらしいのですが、そのファシリテーターのお二人が終わった後で「やあよかったですね。また一緒にやりましょうね」と言って握手してたのを、私を含めて何人かがすごく白けた気持ちで見っていたことがあったのです。それはそのグループのプロセスにいろいろな問題があって、メンバーのコ・ファシリテーター関係に対するフィードバックみたいなことが適切に行われることがあれば、グループはメンバーのものというか、そこに集まった人たちのものになったと思うのです。

ファシリテーターだから、偉い先生だからとか、あるいは、深く関われる人なのだから自分なんか言っているのかな、というようなものは避けて、フィードバックがどのような形にせよ行われたならば、ファシリテーターの人たちにとってもいいだろうし、グループにとってもいいだろうし、後々何かプラスになるのではないかな。やはりメンバーからのフィードバックをしていくということが必要ではないか、と思います。

【林】

メンバーからのフィードバックがあると、そのグループのプロセスに、またコ・ファシリテーター関係に何らかの葛藤があったとしても、それはメンバー同士の葛藤がグループ・プロセスでいろいろ動いていくのと同じように、動いていくことができるかもしれないと思います。けれども、そのコ・ファシリテーター同士に何か問題があるけれども、それを隠してしまうというか、抑えて横に置いて、「ちょっとこれは触れないで」という感じでいると、そこをメンバーが突き崩して、「あなたたちこうでしょう」というようにはなかなか言えないのではないかなと思うのです。

だから、そこは痛くてもファシリテーターの側から「実は自分は、このコ・ファシリテーターとの間でこういう感じで今ちょっと苦しんでいるのです」と

いうことをまず言う。何かファシリテーター中心みたいに聞こえますが、やはりファシリテーターがオープンにしないと、なかなかメンバーの側からそこに関わることはできないのではないかという気がして、この問題に関しては、まず突破口を開くのはファシリテーターではないか、と思うのです。私はそれを一度やったことがありますて、結局メンバーも入ってきていろいろやって、最終的には収まりがつかなかったのですけれども、でも隠してやるよりは、コ・ファシリテーター関係に問題があったということをもって帰っただけでもよかったのではないか、というように思っています。

それから、調査のお答えに頂いたなかにも、ファシリテーター同士が「今こんな感じで行き詰まっています」ということをオープンにした時に、メンバーがいろいろ関わってきて、それでメンバーに助けられてコ・ファシリテーター関係を乗り越えられた、というようなことがありました。それは数少なかったのですけれども、私はそういうことができれば一番いいのかなと思っています。

【K】

メンバーの側から見て、戸惑いを感じたことを申し上げるのですが、技法の問題になるのか、グループの達成度というか成立していくことへの価値の置き方に関係があるのか、あるいは、信頼の問題になるのか私にはわかりませんが、ファシリテーターとコ・ファシリテーターが非常に言葉に拘泥していて、個人の苛立ちとか葛藤を抱えてたいへん戸惑うことがあったのですね。この場合は、先ほどのチームづくりとも関係があるかと思いますが、この人間関係研究会の今日いらっしゃる先生方というように考えると、ある程度わかる、予想外のことは起こらないという気もしていますけれども、あまり違う技法が混在しますとメンバーとして非常に混乱することがありますね。

【林】

それほど数は多くなかったのですけれども、Tグループ的なオリエンテーションをもった人と組んで、たいへん戸惑ったというグループがありました。そのグループは実質的な分裂状態になってしまったのですね。だからAファシリテーター派とBファシリテーター派というように別れてしまって、それはや

はりAさんとBさんのエンカウンターができなかったから、AさんとBさんの分裂がグループの分裂をもたらしたというように解釈しているのですけれども、そこでお互いが違うということを見た時に、その違いを話し合うことがファシリテーター同士の間でできていると、メンバーも戸惑いながらもエンカウンターとTグループの考え方の違いをお互いに受け容れ合えるようになるかもしれない。メンバーも二人の接点みたいなものが見えるようになってくるのではないかと思います。

というのは、ひとりのファシリテーターはカウンセラー的に個人個人に関わっていくようでしたが、その人がどうしてそのような感じでグループのなかにいるのかということ、その人はセッションの外で二人でずいぶん話されたそうです。そこで最終的に、メンバーはAさんとBさんの違いをずいぶん言葉にしたようです。「この先生はこういう感じで、この先生はこういう感じにいる」と。それでそれなりにその違いを捉えて言葉にするような形でグループが進んでいって終わったというようなことですが、やはり戸惑いが言葉に出せないで分裂してしまうか、それとも「ああ違うんだな」というのがグループのなかで体験できたということで終わるというのは、やはりAさんとBさんが違うなら違うでお互いに話ができるかどうかにかかっており、これはひとつの鍵ではないか、と思っています。

【大須賀（克）】

いろいろなことを永年経験すると、エンカウンター・グループの不思議さというか、とめどなく考えが止まらないということがあるのです。これは私自身の経験なのですが、私は気功をやるということを言いましたけれども、不思議なことがたくさんあるのです。何メートルか離れていて急に痛みがなくなったり、あるいは、同じ部屋で座っているだけで足腰の痛い人が治ったり……。それからカウンセリングでもいろいろ経験しています。例えば、遠いところから来られて、ほんの5分ぐらい座っていると後は1時間ぐらい寝てしまうのです。それで、起こして帰ると「先生、また来ますよ」というように言うのです。何もしゃべっていないのに。．．．．．。

そういうことをいろいろ考えると、私ども人間で、言葉を通じてお互いにコ

コミュニケーションをして精神的な発展があるというように考えますよね。しかし、それともうひとつ、何か動物的なものがわれわれのなかに働いて、どこかわからないけれども無意識な信号をお互いに交換しているのではないか、という感じがするのです。ですから魚もそのようなものを何かどこかで受けていて、間違いなく調和しているわけですよね。そういうことを考えると、人間の言葉のレベルと動物的なレベルを含む、つまり、それは宇宙のレベルの調和なのですよね。そういうものが実は働いているのではないかという感じがするのです。例えば気功でも、脳波をとってみると、気功師の脳波が相手と同じようになっていくことがあるのです。そうすると、私どもが他の人にいろいろな意味で関わると、黙っていてもそこに生命を生かしていくような何かが発生しているのではないかと思うのです。

ですから、こういうようにファシリテートした方がいいと考えるのですけれども、何回かやっている間にどうにもならないということになりますよね、自分の心の在り方は自分自身の問題ですからそれはそれなりにいろいろと考えてできるわけですが、われわれは心というものを限定して考えているのですけれども、もっといろいろなつながりがあるのかもしれないし、むしろ、そういうものを活かすというか、そういうものをどこかで感じながら話を聴くということと言葉にだけするということは確かに違うことがありますね。つまり、言葉というのは、逆に言うと心を話さない場合がありますよね。

結局、グループが失敗してだめになると何か淋しく感じますけれども、それしかできなかったというような心境が一方にはあって、考えれば考えるほど大きな調和を崩している面がないとも限らないのです。そういうことをこの頃自分のいろいろな体験から考えたりして、何の確証もないのですけれども、ただ私の考えを申し上げたのです。これは非常に主観的で何ら客観性がないのですけれども、ただそういう気持ちを表現してみたのです。

【H】

メンバーとしてエンカウンター・グループに参加したときですけれども、自分はコ・ファシリテーターという意識は全くなかったのですが、その時のファシリテーターの方がコ・ファシリテーターとして意識していらしたので、「是

非このアンケートに協力をして欲しい」ということでまわってきたのです。それで、それをあまりよく把握しないまま書き進んでいって、「あっこれはいけない、私は全くコ・ファシリテーターとして意識していなかった」ということで私はこのアンケートを書けないのではないかと思います、アンケートに協力できなくて、林さんにお会いしたらそのことを申し上げなくてはいけない、とずっと思っていました。

たいへん難しい問題になると思うのですが、ファシリテーターの役割ですとか、コ・ファシリテーターの関係とかその辺のことが、私はファシリテーターを何回か経験させて頂いてはいるのですが、何かいつもわからないのですね。それは、私個人の問題なのかもしれませんけれども、個人として関わっているのか、ファシリテーターとして関わっているのか混沌とすることがあるのです。

ファシリテーターの役割とは、あるいは、コ・ファシリテーターとしての役割とは、ということを明確にすることは非常に難しいと思うのですが、いつもそのことをどこかで意識しながら進んでいかないと、そういう役割が設定できないうえにファシリテーターとコ・ファシリテーターとの関係というところまで進んでいくと、私のなかでちょっと収まりが悪いという感じもしております。それが私の印象です。

【林】

ファシリテーターの役割というと本当に難しい問題だと思って、私はいつも模索しながらやっているというのが現状なのです。役割というと何か非常に言葉が堅いのですけれども、私は論文のなかでファシリテーターの役割を、例えば心理的安全の風土をつくるとか、心理的損傷が起きそうな時にはそのメンバーを守るとか、それから活性化するとか、いろいろあるとは思っているのですが、私が一番ファシリテーターとしてこうありたいと思っているのは、自分の純粋性とか真実とか自己一致とか、そういうような言葉で言われているところの何か自分が自分らしくあるというか、本当の自分らしくあるということが一番大切なのではないか、というように思っているのです。

そういう自分らしさを離れていくら「この人を守ってあげなくちゃ」とか頭

で考えていても、何か変なことになってしまうような感じがしていて、自分が今本当に感じていることは、自分のなかの体験過程に開かれていること、自分のなかに流れている流れに開かれているということと共通するものがあるような気がしています。例えばファシリテーターはかくあるべしのような言葉にこだわっていますと、そこが見えなくなるというか、濁ってしまう。

このコ・ファシリテーター関係の論文を書いている、私は話し合いは重要だと思うのですが、話し合うべきという頭で話し合いをしてもうまくいかない。本当に話し合えるなとか、話し合いたいなと思うときに話し合えばうまくいくけれども、そうでない時には何か気の流れが濁るというか、何か変なことになってしまうような気がする。だからファシリテーターとしての役割という言葉とは少し違うのですが、まずファシリテーターとしては自分のなかに流れに開かれていたい、ということを一番大切に思っています。

【S】

僕の職場には同僚がいて、意外に同僚との関係がうまくいかないのです。多分こういうようにまとめたら、と答えは自分でもちゃんと知っているし、きっと相手の人も知っているだろうと思うけれども、それにしても人間関係はうまくいかない。その切なさを書いていただけるとまた味わいが出て、このうまくいかないコ・ファシリテーターというのを読んでも誰も異論はないと思うのです。うまくいかないというその切なさというか、うまくいかないときの味わいみたいなものも書いて頂くと、もっと安心できそうな気がしました。

【畠瀬（直）】

研究に対する期待ですが、ロジャースは夢見る人で、本当に人間が真に平等に尊敬し合い、愛し合い、理解し合い、そして、ファシリテーターとしてそこに存在しているというのは、やはりドリームだと思うのです。そこに向かっていく挑戦課題だと思いますね。

いまの日本でコ・ファシリテーター関係というのは、まさに日本の人間関係を見つめるうえで非常に面白いと思います。私自身は、非常に未熟なままやっており、本当に平等にお互いを認め合うということは未だできていないと思っています。だから認め合っていないところというのは、21世紀にはどうなの

か、林さんがずっと研究を続けていかれたらどうなのか、というのがとても興味深いです。

これぞ人間の人間たるどろどろしたところ、小説家によってのみ表現されてきた、というのがエンカウンター・グループでは出てきます。しかも、この研究会のようにお互いに永年顔を合わせてやってきているのではなくて、突然、しかも、相手が昭和ひと桁世代の男性と組まれたときの自分の偽りというのか、「あなたそんなに表面上うまくやっちゃっていいの」と自ら疑問を感じながらやってしまうような、そういう現実が日本にはありますね。そういうドロドロしたところを乗り越えようとしながらやっていると思うので、当面林さんが嬉しいと思うようなデータが出てこないのではないのでしょうか。それにめげずにやっていくのが面白いと思います。

【増田】

書いたものを見まして、線を引いたり、とくに、丸をつけたところがあるのです。「ファシリテーター各人の純粋性を妨げ、グループ・プロセスのなかに不透明なとどこおりをつくる場合がある」という部分と、「コ・ファシリテーターも自分もひとりの人間としてとことんグループのなかで関わり合うことができた方が共に成長するグループ体験となるのではないか」という部分ですけれども、僕にはやはりグループはひとつのドリームでもあるし、実際にできないことかもしれないけれども、やっていくとできるところに行くようになる、そのようなことのひとつがこのようなところに表してくれているのかな、と思いました。例えば、「とことん」なんて僕にはできないし、少しでもやれたらいい。やってみないといいとか悪いとかわからないけれども、終わった後、後味がよかったというような感じが残るというのは、やはりその人にとっての成長に何かつながっていきやしないか、と思って聴いておりました。

【畠瀬（稔）】

僕はコ・ファシリテーター関係の透明さということについて関心があるし、そういうようにできていないけれども、やっていきたいと思っていますね。

【村山】

林さんの研究でコ・ファシリテーター関係にねらいをつけたというのは、林さん自身の課題から、実際に自分が成長していかれるところから現実問題になってきたのだらうと思います。私のなかにはそういう問題意識がなかったのです。ひとりでもやれる、やらなければならなかった。ところが、去年の夏清里で早川さんと組んだり、それから春、琵琶湖で尾崎さんと組んだりして、やはりコ・ファシリテーターというのは意味がある、と思いましたね。

ただ、とことん突きつめていくと、いろいろ問題があるかどうかわからないけれども、やはり人間というのはひとりだけではとても促進できない面もあるし、グループのメンバーと話している折に「ああこういう観方がある、こういう側面ですいぶん自分ができなかった面が助けられているな」というような面をすごく感じます。視点を変えて言えば、そういう面をとりあげると、もっと難しくなくポジティブなデータもたくさん出てくるのではないかと思います。

【永原】

どうも皆さんありがとうございました。林さんありがとうございました。これで第2セッションを終わりにさせていただきます。第3セッションは午後2時からです。

セッション 3

1990年5月4日（金）14:00～18:00

プレゼンテーション3 大築明生

【木村】

それでは6時までの4時間、第3セッションのエンカウンター・グループの『これから』ということで、フォーラムをさらに続けたいと思います。このセッションは、僕と早川さんと大須賀さんの3人が企画担当者になっております。

1月のミーティングでお話頂いたことに触発されたのですが、例えばキューブラ・ロスという方がおり、死の瞬間について研究されていますけれども、癌とか非常に難しい必ず死ぬとわかる病気をもった方たちのワークショップをやった写真集を見ると、そういう人たちのそういうところへ関わって行く姿に頭が下がるところがあるのです。そういうことに対して立ち向かっていくのだな、と昨年の夏アメリカにひと月ほど行ったときにそこで出会ったもう70に近い方ですけども、もともと舞台に立ってダンスをやったような方ですけども、人を生き生きさせていくとか自分自身もダンスを通して生きる力を得て、癌から快復していった体験をもっている方が、グループでダンスを踊ったりすることをやって、生き続けていく希望とか社会の他の人たちとのコミュニケーションを計る場をつくって行くようなことをやられているのです。

グループに関心をもっている人間の社会への関わりが、どういう形で可能なのだろうかとか、僕らの目に映ってないどのような問題があるのだろうかということを含めて、とくに田久保さんにおいで頂いておりますので、ターミナルケアに関わっておられる経験を話して頂くようにしたいと思っています。

それから、大築さんにはご自分のお子さんが登校拒否になられたりした経験をもたれながら、母親のグループをやっておられるので、そういうところからの『現在』、『これから』を話して頂こうと思っています。

また、われわれの仲間である村山さんには、地域のなかでの『福人研』の活

動について今までどういうことをしてきたのか、あるいは、自分たちのまわりにも可能なのか、そういうことを話して頂こうと考えています。

そこで最初に大築さんから話して頂きます。

【大築】

人間関係研究所の大築です。登校拒否児をもった母親のグループというのは、もう既に小野先生が『親の学習会』という形で本にお書きになってますし、皆さんお読みになってる方が多いと思うのですが、私は水戸の人間関係研究所で行われている『母親の会』という母親グループについて報告させてもらいたいと思います。最初、その会の概要をお伝えして、次に私の子どもそのものも学校に行けないという状況になったとき、親としてグループがどのような意味があったのかというようなことを話させて頂いて、最後にもう一度、このような母親のグループのもつ意味を、いくつかに分けて提起させて頂こうと思っています。

まず、人間関係研究所は、基本的には個別のカウンセリングを主とする機関であります。その他に地域の方々にカウンセリング講座を開いて、カウンセリングのもつ人間観などを勉強するような活動を進めておりますけれども、その中で『母親の会』というのをやっております。この『母親の会』は子どもに関する問題を抱えたお母さんたちが、毎月1回、研究所に集まって話し合いを聴くというようなグループでありまして、中学校から高校にかけて学校に行けなくなったお子さんを抱えたお母さんが多いのですが、それだけではなくて、成人なさったお子さんでもいわゆる成人の自立の問題というのかな、そういうことを抱えたお母さんも少なからずおいでになっていまして、逆にそういう方が先輩の母親としていろいろな役割をされております。毎月1回、2時から5時までの3時間、グループで言えばちょうど1セッションに当たるような時間でやっております。ファシリテーターとして大須賀所長が参加して、私はとてもファシリテーターとはいきませんけれども一応スタッフとして参加しております。

このような形で始まって3年か4年になるのではないかと思います。ここ

1年の状況をちょっと調べてみたのですが、毎回11名から12名ぐらいのお母さんが出席されております。それに所長と私に加わりますので、大体13名から14名のグループで話し合いが行われるというような形です。ただ、そういう方が毎月必ず来るというわけではなくて、ここ1年ですと、26名ほどの方が入ったり出たりしているのです。そのうちここ1年で初めて参加された方が7名位で、約4分の1ですが、あとの4分の3は継続していらしてるようです。

母親グループに参加する方がどういう方かという、8割強は大須賀所長といままでに個別面接をしたことがあるか、あるいは、現在面接を継続している方です。その他には、永原さんとか小沼さんが個別面接されてそれで紹介されて入ってくるという方と、メンバーのお母さんたちが紹介して誘って入ってらっしゃる方たちです。

どういうことをやってるかという、当日集まりますと、母親の方の1人ひとりが、そのときの近況を報告するということをして、それを皆んなで聴くということです。自主的に発言する人ももちろんいるし、また、ファシリテーターの方から発言を促されるのを待っている方も結構おいでになるのです。できるだけ3時間のうちに全員が話す、短かろうが長かろうがとにかく全員に一言話してもらう、というのが基本です。発言をした方に対してそのままじっと聴いてることもあるし、誰かがそのことについて意見とか感想などを言うことがあります。

私は、研究所に入って2年半ですが、臨床もやっていないながら『母親の会』にスタッフとして参加してしまったわけです。

そうこうするうちに、私自身の子どもが学校にいけなくなる、というような事態が起こってきたわけですね。最初は中1の長女が行けなくなった。そして、それから5か月くらい経ったら、今度は弟の、当時5年生の男の子がそれに引きずられるような形で学校に行けなくなって、私の子どもは2人とも登校拒否というような状況に陥ったのです。

今日は親の問題なので詳しいことは話しませんけれど、子どもがそういう状況になると、親というのはとっても辛いのです。子ども自身が辛いというこ

とは言うまでもないことですが、親も辛いわけです。どうして辛いかというと、そういう苦しんだり辛そうにしている子どもを見ること自体、辛いのです。それと同時に、下手をするとそれ以上にそういう子どもをもってしまった自分に対する不安や苛立ちの方が強くなるのです。

実はそういう不安とか苛立ちをもってしまう自分自身の人間観とか、人生観とかに対する軽率さというかそれが強烈に感じられ、その辛さというか、その苦しみが親にはあるような気がします。確かにそういう不安とか苛立ちが出てくることは、親自身のもっている不安の反映でもあるのですが、社会で決められた規範とかルールから外れることに対する親の不安があり、そこから外れた子どもに対してそれを投影してしまうのです。先程、小柳さんが脅迫性ということを言われましたけども、僕は、なぜ脅迫的な心理になるのかというと、やはりその背景にある日本の昇進社会における存在の不安というか、存在そのものに対する不安というものが、その脅迫性に結びつく。「～せねばならぬ」という思考になってくるような気がします。

登校拒否の急増については、家庭の病理の問題とか、教師の対応の問題などが非常にクローズアップされており、確かにそれを否定するつもりはないのですが、教育制度そのもの、あるいは、それをつくっている社会そのものが非常に問題になってくる。実際それへの反撃が出てきます。本当に苦しんでいる子どもたちのエネルギーが快復してくるのは、その快復をしっかりと見守って支えていく親が必要だし、そういうように親がなれるようにその親を支えていくことが非常に必要な気がします。

私の子どもがそういう状態になったとき私のもった不安は、その子がそういう状況になってしまったことについて、私の実家の方から非難されるのではないかと、という気持ちから起こりました。それが私自身、娘に対する苛立ちというか、そういうものを強くしていったように思います。さらに、私が人間関係研究所に勤めているということ自体、つまり相談を受けている機関に勤めている者がそういう状況になってしまったということが、職場の方から「何やっているんだ」と言われるのではないかと、というような不安がすごく強かったです。

今考えますと、いろんな本を読んでも、あるいは、面接などをして共感とか受容とか言いますが、どこまで深いレベルでそれがなされているのかということが非常に問題だったような気がします。と言うのは、例えば登校拒否の家族と話するときでも、かなり一生懸命聴いているつもりですけども、どこかで「自分のうちはまだ大丈夫だ」、というような思いをもっていたのではないかなあ。お母さんたちに寄り添っているつもりだけでも、どこかで観察する対象とか、あるいは、操作したり変革させていく対象、あるいは、そういう方々が示している状況を非常にネガティブな症状として受け取っていたのではないかと思いますね。自分がそういう状況になったとき、自分自身がそういうことをしてしまったとき、全くの裏返しが起こってくるのですね。つまり自分が今度は見られる対象になってしまった、自分がネガティブな症例になってしまった、というような逆転現象が起こりまして、ダメな子を育ててしまったダメ親である、という自己否定の感情が強くなりました。

ですからこれを早く何とかしなければいけないという気持ちが先にたって、子どもに対する寄り添いの気持ちはそれ以下でしたね。子どもに対してどう対応するかということは、いろいろな本に書いてあるし、対応策は本を読めば一応はわかるのですが、そうはいかなくて、自分の気持ちを話さざるを得なくなってくるのですね。そういうときに、自分の両親に「実はこうなんだ」と話したら、批判されるどころか、じっと聴いてくれて「これからどうなるかなんてことは考えずに、ゆっくり休ませてやれ」というようなことを言ってもらいまして、非常にホッとした経験がありました。

その次に話したのが職場ですが、大須賀所長や永原さん、小沼さんにも聴いてもらいました。正直いうと、「大須賀所長には何と言われるかな」と思ったのですが、大須賀所長もじっと聴いてくれて、「そうか、君はその子どもから人生において、人生についてとても大切な勉強をさせてもらっているのだよ」と言ってもらいまして、とてもホッとした思いがあります。もちろん、永原さんや小沼さんにも聴いてもらえたと思います。そういうように自分の周りから少しずつ自分を開示していく、ということをしていったのです。

でもまだ母親グループに対して喋る勇氣はありませんでした。しかし、正月

の『母親の会』のときですが、大須賀所長が、「大築君何かしゃべれ」と言われて、「実は自分の子どもも学校へ行けなくなってしまったのです」と、いままでの思いを喋ってみたのです。それまでは『母親の会』には私はスタッフとして入っていましたが、ほんとうにそのお母さんたちがよく聴いてくれたのですね。そのとき、「受容されるということはこんなことだったのか」と思いまして、それからようやく自分の子どものことを肯定的に見られるようになってきたように思います。自分自身が、つまり親自身が、大切にされるという経験そのものが、自分の抱えている問題、あるいは、子どもに対しての問題を直視していくということに対して、とても重要だったのだという経験をさせてもらいました。

そういう体験があるのですけども、もう一度戻って、母親グループのもつ意味を少し考えてみたいと思います。

まずグループでは何が起きてるかということについて触れてみたいと思います。そこで、語り合うことの相互援助作用をまず第一に挙げたいと思います。経験的世界というか、自分の内面と経験している世界そのものを事実として自己開示していくのですけども、それ自体が自己との対決、自己を直視していくことですし、それができるという風土、自己開示できる安全感がグループにはあると思います。そして、その安全感を有しているグループが援助的な役割をもつ、と言えると思います。不登校のお子さんをもって、しかもグループなどに参加されている母親の場合ですが、今も大須賀所長と面接を継続されてるお母さんが、「事実というのは心のひだに入ってくる」とおっしゃったそうです。事実はそれにすぐることができる。これは事実のもつ重みというか、真実というか、それが非常に大事ではないかと思っております。

だから、子どもが不登校になってしまった状況、親としてはよくわからない状況のとき、その存在の不安が多くて、親自身としても偽りの仮面で生きざるを得ない。そのようなとき、グループのなかで事実の自分に戻ってくいい、というような風土に触れて、親自身のエネルギーが快復してくるのではないか、と思いました。グループを通じて親が子どもへの対応を変化させていくということは、その結果であって、その前にグループのなかで命を感じ合うと

ということが非常に大きいのではないかと、思っています。

もうひとつは、なぜグループかということですが、個別カウンセリングを経験しながらもグループに入っていくお母さんたちが多い。その多いということはどう考えるかということです。集団は、言ってしまうと一つの小さな社会のような気がしますし、その社会の暖かい雰囲気の中で自らの存在を肯定していくということが非常に意味があるのではないかと、思っています。母親という役割とか、社会的な役割のレベルで肯定するのではなくて、人間の存在というレベルで自分を肯定していく、しかも、グループという社会の中で肯定していく、ということが意味があるような気がします。同じ母親のグループの中で、同じ苦しみをもっている者同士に通じる何かがあるような気がします。たぶん人間として生きるうえにかかってくるテーマというか、そのテーマと取り組んでいく共同参加者というような意識かも知れない、と思っています。

『母親の会』の中で私自身が自己開示していくという事実は、小さな社会の中で受容されるというレベルになってきている。僕も含めて人間は、社会的存在だと思ってるし、僕自身非常に関係性ということが苦しみの根源だったり、喜びの根源だったりするのですけども、もしかすると外的な社会的規範とか、価値観にこだわって自分の不安を大きくしていくというなかで、それから解放していく、つまり、もう少し自立した社会的存在として解放されていくということは、非常に重要なのではないかと、思っています。

もうひとつは、グループがもっているサイクルの問題ですが、私どものグループは月1回やっております。1か月休むと2か月ぶりに参加することになるのですが、その間で、苦しくても自分の判断と意志で子どもと対応していく。その過程でいろいろな洞察が生まれて、その後グループにやってくる。そうして自分でやってくるということ自体が、主人公としての自分、主人公としての家族を自覚させていくのではないかと、思います。そういうことをするためには一定の時間の経過が必要になるし、それが1か月とか2か月というサイクルとして必要になるのではないかと、思います。人間の成長とか変化は、時間を味方にする事なのだということが言われていますが、本当にそれを実感

するにしても一定の時間の経過というのが必要になるのではないか、と思います。これがグループのサイクルのもつ意味と考えられます。

4 番目として、ファシリテーターの重要性ということが挙げられます。母親のグループでは、エンカウンター・グループ的な要素は勿論大事なだけでなく、コンサルテーション的な動きが当然起こってくるわけです。非常に不安が強かったり、混乱した場合は、どうしたらいいかということが出てくるわけですね。そのような場合ファシリテーターは「皆どう考えますか」というような動きもしますし、グループ全体の動揺が強い場合にはやはりファシリテーターとして助言していくというような動きをする。そこではファシリテーターの重要性がエンカウンター・グループよりも大きいのではないか、と思っています。

それに関連して、グループに参加すること自体、エンカウンター・グループとちょっとニュアンスが違っており、自主的に発言しないで発言を促されるのを待っている傾向が強い。そのことを大事にしながら発言を促していくというような作業も必要ですし、促されてした発言には非常に深いことを話されることも多いものですから、そういうような動きにも対応しなければならなくなる。そして、これはグループそのもののもつ意味にもなると思うのですが、このように継続していきますと、子どもの変化を報告してくれる他のお母さんの話をあたかもわがことのように喜ぶのです。それがスーッとグループ全体に伝わっていく。この強さは、やはり継続するグループのもつ力なのではないか、と思っています。

最後に地域との関わりということですが、この会をどのように地域にPRしていくか、また、関わっていくかということですね。私どもは公には話してないのですが、茨城県では、例えば水戸には『ダカーポ』という思春期を考えるお母さんたちの会があります。そこには登録が100名ほどあり、常時参加が30数名という状態です。そのグループの在り方をどのように考えて、それを社会にPRしていったらいいか、そこへの折り合いをどの辺でやったらいいか、ということがあります。それに加えてもう一つ、ファシリテーターの体制があります。1ヶ月1回の開催というのは、そもそも所長のスケジュールの都合から出てきたのです。ですが、このように続けてくるとファシリテーターを

もっと拡げていくことを考えなくてはいけないというように思います。

時間になりましたので、まとまりがなかったですが、終りにします。ありがとうございました。

【木村】

親のグループに関して今まで続けてこられた、そして、それについてのいろいろな経験をおもちの小野さんに、ここで当然発言して頂けるだろうと思ってありますが・・・。

【小野】

まず、自分と同じような親のグループを運営されている大築さんのお話をたいへん嬉しく聴かせて頂きました。

登校拒否のケースは非常に多くなっているのですが、半分ぐらいしか相談機関には来ていないのですね。50日以上休んでいる子どもは全国に4万2千人もあり、その中で香川県の例はほぼ標準的だと思うのです。小柳先生のお言葉を借りれば、専門家のマンパワーが絶対的に不足している、と思います。そういうなかで、グループをやらざるをえない状況になっていると思うのです。私は、なぜグループやったかという、とにかく相談機関に子どもが来ないのですね。それから、子どもを預かるというようなことをすると、親は預けておけば子どもを治してもらえるように思ってしまい、家へ帰ればもとのもくあみになるというような経験を多くしてきまして、やはり苦しいけれども家庭に置いた状態で親に頑張ってもらい、私たちは気長に援助していく、そのようなことから親のグループを始めたのです。

それを長く続けてきて私自身思うのは、臨床家として成長できたように思います。親のグループをやってきて効果があると思われるのは、いくら私たちが言っても効き目はないけれども、実際親同士が顔を合わせてみて、「あっ、うちだけではなかった」ということだけでも非常に大きな効果がある、と私は思っています。それから、親が何か気づいたというか、知恵を得たというか、そのことを他の親たちが素直に受けとりますね。私が言うと、「あれは先生の話」というように、横に置かれてしまうのです。他の親が言ったこ

とは、もの凄くよく聴きます。

それからもうひとつは、ひと月2回、10時から12時まで、2時間しかセッションをやらないが、必ず皆さん終ってからそろって食事に行きます。これを二次会と称していますが、この二次会を当てにして来る人もいたりして、ここから日常困ったことをお互いに電話で相談し合っているようです。だからそういう面で、私の負担が非常に軽くなります。これも効果のひとつかと思います。さらにもうひとつは、私のところへ来ているのが12から13人ですが、毎週までは必要がないので2週間に1回位がいいかな、と思っております。そこで、親の進捗具合は私にもわかりますし、他のメンバーにもすぐわかりますから、自分に一番近いけれども自分より一歩進んでいる親は、誰かをすぐ目聡く見つけて、電話で連絡をとり合ったりしているようです。そのことが非常にまたいいなあと思います。

学校側から、学校へ子どもを来させられない親として非難される、あるいは、学校へ行けと直接言わないダメな親として非難されることに立ち向わなければいけない。学校の先生が家庭訪問をして、子どもの部屋へ保護者に無断で駆け上がって指導するという形で子どもを傷つけるということに、親は立ち向かって子どもを守らなければいけない。子どものことをわからない父親に理解させ、子どもを守り、その子どもに対処する意見の食い違いにも直面しなければいけない。このような母親自身の人間としての成長がどこかで留まっているものを取り戻さないといけない。人間として何重にも苦しみを味わう、それを支えるという仕事かなあ、と思っています。

そうしたもののからひとつひとつ強くなって成長されていく姿は、本当に教えられるというか、畏敬の念で眺めさせてもらっているというか、そういう親に会って頂いて、本当に臨床家冥利だ、そのような気もいたします。

【村山（尚）】

私は、『主婦のための火曜会』というのを『福人研』とは別の運営でやっているのですが、これは、主に登校拒否児のお母さん方が集まって、エンカウンター的なグループを主体的にすすめているグループなのです。大築さんが共同参加者というような感覚と言っていましたが、私もまさにそうだと思います。

す。キーパーソンになっていく人は母親たちだと思っていますので、私ができることというのは、私がどうやってお母さんたちに主体性をもってやってもらうかを工夫することだと思っています。月に4回やりまして、1セッションが3時間ですから午前と午後使えるわけです。

グループを一括してしまわないでやっていますが、少数の5から6人で、その出発点はみな違います。場所も成り立ちも、のろしを揚げた人のネットもまた違うわけです。そのような事情で、どの場所で、どのような時間を使っていくとか、月何回にするとか、いろいろとそれぞれのグループで決めてもらうようにしてるのですね。だから3種類のグループは、『主婦のための火曜会』で動いてるときがあるし、『福人研』の方に来てる人もあります。また、それぞれ独立つしてやっているというのもありますし、オープンで8年続いております、月1回やっているというのもあります。自分たちで選んで頂いて、自分たちで運営してもらって、私は物理的な部屋と心理的な場を提供すると共に、一緒に参加するというような立場でやっていて、いろいろ学ばせて頂いているな、という気がしています。

【大築】

夫婦の間でも人間を見る目がずい分違ってきて、私自身こういう形から学ばせてもらったことが非常に多いように思っています。それから、あるお母さんの発言だったのですが、「私は自分がこんなダメな子をつくってしまったダメな母親だと思っていた」と言うんですね。だけど、よく考えて見ると、そのときそのときなりに精一杯やってきたし、それしか私は生きられなかつたということを考えると、もう一度自分の人生を考え始めている。そうしたら、「自分の人生を自分なりに大切に生きようと思った」と言うのですね。

そして、今まで子どもをダメだと思っていたけども、子どもは子どもなりに自分の生きたいように生きているということが何かわかってきた。独立した人格としてお互いに観て、お互いを大切にすることが、いろいろな過程を通して、あるいは、表面的には学校に行けないなかでも微妙な変化として起こってきたし、そのような動きにメンバーがなっている。そういう意味での小さなことにも反応する感受性とかやさしさとかが、グループのなかで育っ

ている、ということに対して僕はとても感動しています。

【小野】

『これから』ということに関して、臨床家の社会的貢献のことですが、私がやりたいと思っていることは、エンカウンター・グループでやってきたことを少し応用すれば、例えば、中学校や高校に入学した子どもたち同士と先生との人間的な親しみをつくるために、半日とか1日とか時間を頂いて、かなり予防的なことができるのではないか、そういうようなことを試みたいと思っています。

日本の教育の知育偏重を修正する点も含めて、エンカウンター・グループは大学レベル以上のところでは、かなり試みられているけれども、それ以下の教育の場合ではあまりなされていないので、何か貢献できる道を探りたいな、とそんなことを考えています。

【田久保】

お母さんと登校拒否の子をもったお父さんのお話を聴いて、30有余年前を思い出しておりました。小学校3年の2学期から本当に病気だったのですけれども、半年ぐらい学校へ行けなくなりまして、そして病気は良くなったのですけれども、その後1年半ぐらい学校へ行けなかった。いま、そういう自分がお父さんや先生のお話を聴きながら、11歳の頃に還って子どもの気持ちを聴いて欲しいと思い、どうしてもひと言話したくなりました。

どうして行けなかったか。半年も病気で休みますと、もちろんその授業について、すごく違和感があったりするということもございますけれども、やはりいま思いますと、あのときの私は、「なぜ行けないか」とか、「どういう気持ちでいるのか」というのをうまく説明できなかった。学校へ来れなかった子どもは弱者であるし、私にとって学校は強者というか、力のあるものであった。

いま思いますと、1年半も経ってなぜ行けるようになったかと言いますと、父が幸いに教育者であって、ひと言も行けと言わなかった、ということが大きいと思います。母は最初の頃は行けと言いましたし、説得してくれたと思いますが、やっぱり立ち上がるのを待って、歩くのを待つ親父のまなざしがあったことが一番力だったかな、といま思い出しました。

そのときの気持ちは、勉強がわからないから行きたくない、というような単純なものではなくて、もっともの凄い力の強いものがワッと抑えつけてきているようで、誰にも説明できないものだったような気がします。弱者はそれに押しつぶされて悲鳴をあげているというのが現状ではないかな、と先程聴きながら、いまとなってやっと説明できるようになったと思っていました。

【八尾】

『ファミリーサポート』と名付けて家族に対しての援助活動をさせて頂いているのですが、相談にお見えになる90%が子育て、子どもの問題で、なおかつその中で75%が登校の問題という現実があります。家族に対してわれわれがどれだけサポートできるかというスタンスをとらせて頂いているのですが、大築さんのお話を伺いながら、お母さんや子どもさんに対して本当にどれだけ援助ができていいのか、気持ちをサポートできているのかという思いとか、もう一度原点に戻ってみようという思いがひとつしました。

それともうひとつ、私自身がこういう活動をさせて頂きながら、今自分のなかで問われているのは、家族から個人、家族から社会というように大きく視点を当てた場合、僕自身がどれだけの生き方があるのかということの頭のレベルだけではなく、本当に私が容認できているのだろうか、と考えていました。「良い学校へ行って、良い大学へ行って、良い会社へ入れなんたらあかんぞ。」というところなのか、それちももっと違う道を歩んでいっても人間は幸せになれるんだ、ということを実際にどれだけ自分がわかっているのか。もしそのことが本当に僕自身わかってなかったら、やはりお母さんお父さんとしてもその元の道に戻したいという思いに対して正面から立ち向かえないし、外れたら不安がある。

しかし、「生き方というのは一本の道だけではなくていろいろ伏線があるんだ」というような捉え方が、自分のなかできちんとつくられていて、社会に対して提案していける、というような動きをしていきたいと思う。社会のなかでいま私たちが『ファミリーサポート』というような活動をしているとするならば、「人生いろいろな生き方があるんだよ。」というように自分をなかでおさえてみたい、とお話聴きながらいたしました。有り難うございまし

た。

【田久保】

いま思い出したのですけれども、父の言葉は、「人間はみな、自分の物差しではかるけれども、坊さんの物差しで見たらば、そんなこと小さいことなんだよ。」というような意味だったように思います。小学校3年の頃でしたがとても心に残っていて、「だから心配ない、大丈夫だ。だから行けるようになったら学校へ行けばいいし、学校が全てではない。」というように、いま思い出してみるとなかなか有り難い親父だったような気がします。

彼は浄土真宗の僧侶でしたが特別に何か凄い修業をするというようなものは何もございませんでしたが、人生観みたいに関教のものの考え方が貫かれていたのは確かで、その私に対する言葉も、それを子どもにわかりやすく話して頂けたと思っています。

いまでも、私の心のなかにその言葉とかまなざしとかは脈打ってる、生きている、という感じがします。「凡夫の物差しではかる必要はないよ。」という言葉が、その後何かにぶつかるたびに非常に助けられるという感じがいたします。

【増田】

あまりそのまま言えるかどうかわからない気がしながらですが、大築さんの話を伺っていてエンカウンター・グループが登校拒否の母親のグループに発展したといひましようか、エンカウンター・グループが社会的に発展していくひとつの姿なのだろうと思ひながら、登校拒否の子どもをもつ母親同士がお互ひに、「そうなんだ、そうなんだ」というように、話ができるという面はあるのだろうと思うのですが、積極的なもの、もうひとつ、という点がどうなっているのかな、と想ひました。

それから、「違いを認める」というのでしょうか、登校拒否という点では同じようなものがあるのかも知れませんが、それぞれ違う面があるでしょうし、そういう違いが認められるということがそれぞれのなかに出てくると、また別の動きが出てくるのではないかと思ったりするのです。実際にグループで思ふことのひとつは、それぞれ違いが認められる、認められるというのは、いいか

ら認められる、悪いから認めないのではなくて、事実として違いがそのまま認められるという見方が生まれてくるのを実感するのですが、そのようなことが母親のなかで出てくると、また何かひとつ違う何かが出てくるのではないか、と思ったのです。僕自身、その違いが認められないようなときがあったり、認められるときがあったりしますが、自分自身を振り返って聴いておりました。

【大築】

事実を話すということ自体が、それぞれの世界を大事にする、それぞれの世界を独自のものとして尊重していく、というように思います。それぞれの世界を一生懸命聴くということが、われわれのグループでいえば違いを大事にするということでしょうかね。

皆それぞれ違う世界なのだけれども、そこに心打つものがある、少し深いレベルで人間のもつテーマとか命のレベルでの共通項というのがあるように思いますね。そうしたことから動きに逆にわれわれ自身が学ばされることが多く、いろいろな経過報告という形はとりますけども、そのなかで出されるお母さんのエッセンスというか、核心を突いたというか、そのような非常に大事なことが届いてくるような気がします。

【B】

いまの増田さんと大築さんの議論にひと言だけ加わりたいのですが、僕も始めて3年ぐらいの『マンスリー・グループ』をやっているのですが、ある人が非常にしんみりと話して、そして、みんながじっくり聴き入るという風土になるのに3年ぐらいかかったのですね。大槻さんの話を聴いていると、最初からそういうグループだったような印象で語られたのですが、何年か経っている、既に進んでいるところへ入られたのですね。（そうです。） 増田さんが言いたいことは、こういうことじゃないかなと思うのだけど・・・。

話題を共有するということではなくて、一致する時期があるのだけど、もう少しやっていくとだんだん「お互いに違うぞ」というように「同じ登校拒否だけれども違うぞ」、という段階が出てくるのですね。最初のうちは、「あっ、うちと一緒」とか、似たところの話は真剣に聞けけれども、ちょっと違うとあまり聞かなくなるのですね。全然別の社会的な問題に関心をもつとか、そうなっ

たときに登校拒否をもとに集まってきたけれども、何となく「違うところへ来たな」というようになっていく。なんかそこだけにとどまらなかった、という実感はありますね。

増田さんも、なんかその辺のモヤモヤみたいなことを言いたかったのかなと思って、答えていいのかわかりませんが、言葉にしたいくなりました。

【木村】

それではここで休みを入れたらどうかと思います。そして次の話題、今度は田久保さんをお願いすることになりますが、よろしくお願いします。。休憩は10分でよろしいでしょうか。

〈休憩〉

プレゼンテーション4 田久保園子

【大須賀（克）】

私と木村さん、早川さんは、『これから』という主題を与えられたメンバーですが、地域との関わりで私たちが学んだ知恵をどのようにつなげていけるかということを考え、今日、田久保さんに来て頂きました。田久保さんは、築地本願寺のなかにあります『東京ビハーラ』という所で、患者さんとの話し合いとか家族との話し合いとか、やはりグループが主題になっているというようにお聞きしているものですから、お願いいたしました。

【田久保】

先程、私自身の子どものときのことを思いがけず聴いて頂きましたが、私はお寺で生まれました。海岸にある浄土真宗の落ち着いたお寺ですが、普通に登校するようになりましてからは、まあまあ何となく穏やかに結婚いたしました

て、2人の子どもを育てて、12、3年経ちますとふと暇になりまして、その頃またぞろと申しましょうか、何もかも虚しい、まさに主婦症候群のど真ん中にいるような感じでした。

その頃企業のインストラクターの仕事をしておりまして、カウンセリングの基礎を3年ほど教えて頂きまして、そのときロジャースのカウンセリング理論などを聴いておりますうちに、聴けば聴くほどにと申しましょうか、「これは私が子どものときから聞き慣れた仏教の言葉で説明された方がずっと私にはわかり易いとか、非常に胸にとんと落ちる」とどんどん思うようになりまして、その当時の仲間に話しましたけれども、あまり理解されませんので、「あー、違うのかな」と悩んだりしておりましたときに、仏教伝道賞をお受けになりましたときのお話を聴きまして、また、その後ご本を読ませて頂きまして、「あー、自分も間違えてなかったんだ」とホッといたしました。

その後もう少しきちんと仏教の勉強をしたいと思いまして、仏教学院という専門学校へ入学いたしました。そこで得度という資格を頂きましたので、浄土真宗本願寺派僧侶ということになっております。そこで卒業する頃からずっと流れはあったのですけれども、浄土真宗の仏教ホスピスと言いましょうか、『ビハーラ』という機関がつけられました。『ビハーラ』というのはインドの古い言葉でサンスクリットでございますけれども、僧院から転じて安らぎの場所とか、心穏やかになる場所とかそういう意味ですが、『東京ビハーラ』という会をつくりました。

ちょうどその頃ろからご一緒に準備をして世話人、お手伝いをさせて頂くことになったわけでございます。それができたきっかけは、僧侶のなかからもっと社会的に命の問題に取り組もうではないか、という動きそのものです。会員が170から180人になっていると思いますが、僧侶の方だけでなくお医者さんとか看護婦さんとかボランティアとかいろいろな方がいらっしゃいます。

いまやっておりますことは、老人病院や老人ホームへお見舞いに行つて法話をするとか、いまは私ひとりなのですが国立癌センターの病室に行つて患者さんと一対一でお話するとか、築地本願寺のなかの部屋で週に2回ほど電話相談をやるとかしております。その他にいろいろな宗派のお坊さんと一緒にお医者

さんや看護婦さんを交えて、それからカウンセラー、大須賀先生も会員になって頂いておりますけれども、これらの人を交えて、『癌患者と家族の語らいの会』というのをひと月1度、場所も築地本願寺で第1土曜日の午後、今まで3年ほど続きまして、次は35回目になると思います。

そこで、『癌患者と家族の語らいの会』のお話を聴いて頂きたいと思います。これは1時半に始まりまして、40分から小1時間講師の方のお話をいたします。いろいろな方をお呼びしましたが、お坊さんだったりお医者さんだったり、患者さん自身だったり、自分も患者で家族も癌で亡くした方とか、それからお医者さんで自分が患者である方などがおります。その後2時間ほど12、13人から多くて17、18人の5つのグループで話し合うことしております。

そのグループはこれまで30何回か開催されまして、印象に残っているのは、最初の頃でしたけれども、弁護士の患者さんでもう転移されていて、「癌というのはとっても淋しい病気なんですよ」とおっしゃるのですね。自分はたまたま癌ということがわかって、先生からきちんと聞いたし、きちんと聞いたから誰かに話そうと思う。ですけれども、それまで親友だと思っていた人でも家族でも近所の人でも、自分が癌だと言ったとたん何となく目を伏せて、「それはそれはお気の毒」と口のなかでもそもそと言って遠退いて行ってしまい、次からはなかなか近づいてきてくれない。自分はその病気のことやいろいろなことをいっぱい話したいのに話す相手がいらない。話す相手が逃げて行ってしまうというか、目を合わせるのを恐れるというか、避けて逃げてしまうのがはっきりする。それが真に淋しい、とおっしゃった言葉が強く残っています。

私と同年配の女性の方でしたけれども、乳癌と言われたときに、頭のなかが真っ白になって、不思議なことになぜか坊さんの前に座りたくなったということです。東京の街というのは、知らない人が本堂に入るというのは非常に難しいそうございまして、とても入れるような雰囲気ではない。「街中歩き廻って、そのときほど寂しい思いをしてことがなかった」とおっしゃった言葉がいまごく心に残っております。この患者の会に出席する患者さんは、自ら出席するわけですから、自分でちゃんと病名も知っている。ほとんどの方が自分は

転移しているとの確にわかってる方が多くて、そういう意味では冷静に現状とかも心情とかもはっきり話して下さいます。

ですけれども、問題はその家族ですね。その会に参加している方は、「問題は家族ですね」というケースがとっても多くて、毎回ほとんど繰り返しという感じです。家族の誰それが癌で、その人に医者と共謀して病名を言わないことにしている。その病名を言ったら聞いたとたんに関心麻痺を起こしそうな人だから、とても受容できない人だから、言えない。毎月のお話で、いろんな方のケースを聞いていますと、医者や親類家族もろもろが共謀して嘘の話をすることなのですね。本当の話をしなくなる。人間にとって一番大切だと思いますけれども、その人間が信頼している人間関係というのを、癌だと知ったとたんに関断ち切られてしまう。そういうケースを毎月嫌というほど聴くはめに陥る。

たまたまうまくいったときには聴くことができますが、多くの場合うまくいきません。グループと申しまして、エンカウンターでファシリテーターがいてくださって、話したい方に話させて頂くというグループではなくて、まさに素人の集まりですので、折角そういう貴重な話が聴けるのに、本当に話したい患者や家族の方に話させないで、聞かせたがるのが医者や坊主と学校の先生です。どうしても説教したがるのか、自分の知っていることを教えたがるのか、グループはかくあるべしと延々と説明するとか、その繰り返しが多いのです。

グループに入るたびに、「人の話を聞くためにどうしたらいいとか、気持ちを自分が受けとるためにはどのような方法があるのか」というのを話して頂くか、話して頂かなくてもグループのなかに入って頂いて、うまく交通整理をして頂く方がひとりでもいてくだされば・・・。」とここ3年ぐらい考えておりましたので、今日そのことをお願いしたかった。

その『癌患者と家族の語らいの会』だけではなく、私が行っております癌センターのお見舞の方と患者の会に出てきてた人が、再発してまた入院し、手術が終って、また出席して下さる方などなどとも交流しているので、どちらでも感じるのですが、強者が弱者を踏み潰してる、というのが実感でございます。

す。仏教者だけでなく、宗教家とかカウンセラーの方がまず手をつなぐ、ということがものすごく大切なことではないか、と強く感じております。

癌センターのお見舞は、末期の方の場合が多くて、病室やベッドの傍らにべったりとついている場合が多く、その場合ベッドに寝て死を見つめている人は真っ向から死に向かい合った人ですし、その人が残りの生をどう生きるか最も大きな課題になると思います。それを教えてくれる先生が必要なのではないかと強く感じます。死を見つめた人こそがどう生きるかの答えを知っているともいえますが、そういうことをすごく感じて、ベッドの傍らにいるときも、黙って側に座っているだけ、患者さんの話されることを聴くだけ、というように大きい流れのなかに共に生きてるといえるのか生かされているといえるのか、そういうことを実感します。

穏やかに共に生きているというような交流のケースのときでも、それと正反対のすさまじい、患者さんと家族、その回りの人の目も当てられないようなときも、ただ傍らに黙って座らせて頂くだけで、私自身がどう生きたらいいのかというのを強く感じます。

つい最近、1週間にもなりません、癌センターですごく辛い思いをいたしました。50代の女性ですけれども、子どもがなくご主人が何年か前に亡くなられた方ですが、癌が転移しており、だけどまだ病名が告知されていなかったのです。親兄弟などにもきちんと説明する、という状態の患者さんではなかったものですから、最近になるまで、「もうしばらくしたら・・・。」と引き延ばして、いよいよ危ないと思ったら遺産相続が問題になった。その方はお習字の先生でしたが、私に会いたいと言って電話がかかってきて、急いで行ったときには2時間ほどの間に遺産相続のことでトラブルが起こってしまいました。

後で看護婦さんとかに聞いてみましたら、兄弟が印鑑を押させるために弁護士を引き連れてきて、主治医を立会人にして抑えつけて遺言状を書き替えさせたということです。そういうことを目の当たりにしますと、病院に行くことも、ビハラの運動も、カウンセラーも、日常の人間関係といいましようか、人と人との間をもっと善くすることをやっておかなければ、入院した後では遅い、と

強く思いました。

そのような点も含めて、患者さんから学ぶものがたくさんある、それは患者さんのためでもなく、患者さんの家族のためでもなく、自分のためになる、ということがわかったといえます。ありがとうございました。

【早川】

私はこの3月に、大須賀先生から田久保さんをご紹介頂きまして、4月の初めにこの『癌患者と家族の語らいの会』というのがあると教えて頂いて参加してきました。そのことを少しお話したいと思うのですが、その前に私がどうしてこのターミナルケアにコミットする、他人事でないと感じて自分が関心をもたざるを得なかったか、というのを話させて頂きたいと思います。

25年前に実の父親を癌で亡くしたのですけれども、そのとき、私はきちんとした別れを父とできなかったのも、そのことを25年間引きずってきています。そのときは瀕死というわけではなかったのですけれども、父は自分が癌であるということもわかっていて、再入院のときに家を離れる前の晩、私に、「きっと自分はもうこの家に帰れない。だからお母さん、この家のことを頼むよ。」と伝えたかったのだと思うのです。

だけど私は、そのとははまだ父が癌でどれくらい苦しいかとか、それから父がもういなくなって死んでしまうというようなことを本当に受け入れられなかったのです。それで、「自分はここには帰ってこれない」と言われただけで、なんか泣いてしまって、その後のことをきちんと受けとれなくなって、きちんと話し合いができなかったのです。そのことがずっと私のなかで大きな問題として残ってありました。

それからもうひとつは、入院をして臨終のときにも機械がパァーッと入ってきてしまって、最後の別れをすることができなかったのです。

このふたつのことは、とても心残りがあるというか、人と別れるということを実際にきちんとしなくてはいけない、人が死んで別れるのだということを実際に踏まえられる、そういう現実がきちんと直視できて初めて生きられるのではないかと、思っていてまして、でもやっぱり癌の患者さんに近寄るのが恐ろ

しかっし、自分が癌であるということにも怯えてました。

今これから死のうとする人の傍らに行くっていうのは、私にはとっても怖いことで、家の近くにも梅町病院というターミナルケアの病床をもっている病院があるのですけれども、そこにも私は行きたいと思いながら、なかなか行かないでいたのですが、「ようやく何か時が来た、ようやく私は癌の患者さんの傍らに行って、もしかしたらじっと座っていられるかな」というように、何か時が来たと思ったのです。田久保さんをご紹介頂いたり、このフォーラムでこういうことを取りあげることができたということは、私にも時がやってきたのだというような感じをもってます。

それで、『癌患者と家族の語らいの会』に参加させて頂きましたが、それは、お医者さんが1人で患者さんが6、7人いらして、家族の方が3、4名、あとは私のようなボランティアの方だったのですが、そういうなかで切実な患者さんと家族の叫びというのでしょうか、そういうのに接して身が引き締まるという思いをしました。と同時に、不安とか辛さを語る場がない、というように思いました。そういう所にいらっして最初に口を開くのは、「こういう状態なのですけど、これは再発なののでしょうか？」「うちの家族にこういう末期の癌の人がいるけれども何をすれば助けになるのでしょうか？」というような、お医者さんに対する問いかけなのです。何かお医者さんにすぎるような問いかけなのですね。

それを聞いていて、やっぱりご本人も交えて本当は何が一番その人にとっていま必要なのか、ということをお話することが求められていると思うのです。ですけど、それができていない。それからある患者さんは、手術をされる前に自分が癌であるとカルテを見てわかって、それでお医者さんに、「そうだろうッ」と突き詰めるけれども、お医者さんも看護婦さんも逃げ回ってそれをきちんと話してくれない。「訴えたいけど訴えられるのだろうか？」と、問かけるんですね。その裏には、「本当のことを話してよッ」という気持ちがあると思います。

なんかさみしさと怒りというかしら、そういうものに接して、やっぱり本当のことをきちんと話す、それがどんなに厳しいことであってもきちんと受け止

めながら話す、話し合うということがいかに大事なことから私はそこで思いました。患者さんたちも、そういうことがもうできない、と半ば諦めているような気がしました。だから質問の形でしか言えない。でもその裏にはすごくそういうことをきちんと踏まえ、直面して話し合いたい、というような思いがあると感じました。これを何とかちゃんと向かい合って話せないだろうか、私にできるかできないか全然わからないのですが、そういうことが求められてるし、私自身の問題としてもそれができるようになるといいな、と思いながら、その会に出させて頂きました。これからも自分のために、その会にそういう所にもつながっていきながら見つめていきたい、と思っております。

【広瀬】

私は看護婦なので、いまのお話聴いて耳が痛いところもありますし、確かに医療者側は強者で患者は弱者である、という面が病院のなかであると思うのです。私も母を癌で亡くしまして、娘として付いていたのですけれども、そのときにやっぱり医療者側に対して、看護婦に対して、不信を抱きまして、自分が看護婦であったにもかかわらず医療者に何か相談したいという気持ちになれなかった。

そのときは娘として精一杯やりましたから、全然それを振り返るという余裕はなかったのですけれども、後で考えて、自分が看護婦なのに看護婦に対してそのような気持ちになるとう状況がすごく怖いと思いました。

私は看護婦ですけれども、自分が病気をしたこともあって、そういうことが大切なのではないかと思ってきたのですけれども、いま、大学院という恵まれた環境のなかでいて、ずっと透析の患者さんと関わってきて面接してきているのですけれども、一般にカウンセリングを受けに来る人とか、グループに出てくる人といのは幸せな人だという気がするのです。病院で患者さんに接していると、お金持ちの人もいれば生活保護を受けている人もいるし、カウンセラーや人に話したいと思う人もいれば、全然そういう人を拒絶してしまう人もいれば、人に話ができるそれだけのエネルギーをととてももてないような状態の人たちもいて、そういう人たちにどういうように関わっていけばいいのか、と考えています。

田久保さんの話を聴いていて看護婦にしても医者にしても、本当に患者となかなか直面できない。そういう部分がまだまだあるのですが、やっぱり私は看護婦として、患者さんの傍らにいる者として、その内面に直面していきたい、というように思っているのです。

【鈴木】

広瀬さんの話から、私も看護婦ですので触発されたわけで、今度の人間性心理学会で発表させて頂こうと思って、原稿を書いたばかりなのですが、医師も看護婦も全然動けなくなっているなかで何とかしたいと思いながら、患者さんを遠巻きにしている、という感じがするのです。そういうなかで病院という場が、私は何かエンカウンター・グループのようであればいいな、というも思っていて、カウンセラーが何ということなく浮かんでいるようにおれば、その場が動くかな、とすごく感じています。

私も実はボランティアで、夜、ときどき癌の患者さんとの面接を、この1、2年させて頂いているのですが、そのときに思うのは、私は病棟の看護婦ができないケアを何とかしようと思ってカウンセラーのように病棟の傍らに行くのですが、そうするとそれは看護婦ではなくなってしまって、病床で果たすべき機能を誰がやるべきなのかと思ったりするのです。やっぱりそこにカウンセラーが果たす社会的な場というのがあって、看護婦には看護婦の限界があるかな、医師には医師の限界があるかな、社会的なニーズとして問われている課題なのかな、というように捉えているのです。

【広瀬】

看護婦さんがお二人も目の前にいらっしゃるとは思いませんで、いまお話を聴きながら、病院のなかには何かしてあげる人ばかりいるのですね。お医者さん、看護婦も、家族の人も……。だから自分が患者になったらという目で、私はそこをを考えていたと思う。そのときに何もしない人がせめて一人でも二人でもいる必要がある、と気づいたのです。

何もしない人、何もできない人、ただ黙って座っている人、そういう役目は、宗教家とかカウンセラーができる、させてもらえるのではないかな。われわれも共に死ぬ身だから、そういう基盤の上に立って、黙って傍らにいる、何も

しない何もできない人がいる必要があるのではないか。

【大須賀（克）】

生死の問題というのは父親が亡くなるときぐらいのことで、そうなんだろうというようにしか思えないけれども、たまたまカウンセラーとして、そういう人たちに、あるいは、そういう活動にどういうアプローチなり意義があるのかというのが、ひとつの私の課題なわけです。

そこで思うことは、どうもがいても、どんなに慰めようと、自分の存在がなくなる、そのことへの孤独感ですね。結局ちょっとした悩みにしても人間の存在に関わっていると思うのです。このあたりにね、本質が出てくる瞬間があるのかな、と思うのです。癌に自分になったとき私は宣告されたいのかかわからない。一応宣告しないでくれと言っているのです。今のところ自信はないのですよね。たぶん最後には、わめきながら死んでいくのではないかな。何だか最後までカウンセラーとして死んでいきたくないしね。

私の知っている方のご主人が癌で亡くなったのですが、亡くなる少し前ですけども氣功をやって欲しいということでやりましたら、その奥さんが、一番助かったのは、「最後にはわめいてもいい」というように私が言ったことだったと言うのです。僕が病室に入りちょっとお会いしたときに奥さんが、「体が急に変わっちゃった」というんですね。不思議なように。

アメリカで癌患者とかそういう人にいかにアプローチしているか、看護婦さんやセラピストが集まって病院のなかで話し合う場に出席してたのですが、アメリカでは割合ははっきりと表現するわけですね。いろいろ考えてみると、自分のそういうことを知りたいときに知れない苦しさを一方で思うし、最後の命を無駄なく生きてほしいという気持ちもありますよね。知らせて最後まで対決というか、それを超えて行ってほしいという願いもありますよね。それはそうせざるを得ない苦しみののではないかと思ったりもしますね。迷いながら死んでいくことしかできない人もいるかもしれないし、自分にはそういう迷いがあって怖がる面が強いのかと思ってみたりします。

若干信仰的な思想があれば、それなりにアプローチできるけれども、カウンセリングですとそういうものが逆に言えないところがありますよね。「死んだ

方がいい」とか、「生きた方がいい」とか、「こういうように生きたらいい」とか、本来はない世界のなかで話を聴いていく、そういうものがわれわれに若干あって然るべきだけど、究極の場でどのように自分が保てるだろうかという迷いを考えると、カウンセラーはもう少し人間の存在に向かってもっと勉強していかなければいけないと思います。

【見藤】

私も看護婦で、非常に切実に伺いました。私もずっと考えている問題のひとつで、日本ではまだ50%以上は告知していないと思うのです。告知した後の対応ができない、ということも大きいと思っています。看護教育のなかでエンカウンターをするのは、告知した後に引き受けられるナースになるということ、その延長線上でつながられるのではないか、という気持ちがあるのですね。私は、エンカウンターを看護教育のなかで、そのように捉えてやってきてはいますけれども、告知の問題は簡単ではない。

それからアメリカでは告知されることが多いのは、私は初めはすごい人権の国だからとか、自立しているからとか受けとったけれども、どうもそうではなくて、医療訴訟が多いので、きちっと告知をしておかないと、後で「おまえが告知しなかったからこういうことが起こったんだ」というように訴訟に勝つためにやっているのだ、という側面もあると理解しました。患者さんはだんだん自分の状況をわかってくるから、「私は癌なんですね。」と看護婦さんによく訊くことがあって、そういうときにイエスともノーとも言わないけれども、お互いの心のなかでそれをしっかりと受け止められるようなナースの存在が求められる、と思うのです。

【増田】

いま、話を伺ってまして、予知あるいは予測しないでいられる存在やその在り方ということを考えていたのです。例えば癌患者の傍らにいたことさえできないことがありますよね。きっとこうなるだろうと思ってしまうと傍らにいられなくなってしまう、というように……。僕が父親の死のときにどのように自分になるだろうと思っていましたけれど、息を引き取るまで傍らにいられた。とにかくいられた、ということがあった。

それをいま考えると、癌ではなかったのですが、死への予知や予測が自分のなかで起こってきながらも、少しでもそうでなくいられるということが最後まで傍らにいられるようにさせたと思います。予知・予測のようなものがあると、さらに「あげる」、「してあげる」というような気持ちも出てきたりしないかなと思うのです。できないことを「してあげる」気持ちになるといっそう自分を過小評価してしまうことになるのではないかとも思います。

傍らにいて聴くというのには、予測・予知があると、その気持ちを聴けなくなってしまうのではないか。そのときの気持ちそのもの、語られるのを聴くときに何かをこちらがもってしまうとできにくくなってしまう。そういう点で、僕はカウンセリングのなかに、「あげるーもらう」というような関係が生まれたらそれ自体カウンセリングにならなくなるだろう。このようなことを考えながら、聴いておりました。

【木村】

去年の11月に僕の父が、9月から入院して、結局もうほとんど言葉を発さなくなっていて2か月ほど入院していたのです。傍らに母がついていたのですが、けれども、「易が来たよ」と言えば目で合図するような感じで、わかっているのかなと思うのですが、確かめようがない。2か月間できるだけ通って、「もっと話をしておけばよかったな」と本当に思ったのですがけれども……。

僕の父親の古くからの知人で70歳ぐらいになった人ですが、その人は結局何ももうできないときには傍らにいて、手をじっと握っていた。そして、君も、「お父さんが亡くなる時、誰か親しい人が亡くなる時にはしてあげるといいよ。」と言ってくれたのですよね。その言葉があるとき蘇ってきたというか、言葉は通じないけれども病院に行っては傍らで手をつないでいるというようなことをしていました。

病气らしい病气ではなくて、結局90歳でだんだん木が枯れるて倒れるようにしていったのですが、自分の父親が死んでから、同僚のお父さん、お母さんもどういふわけかたくさんその時期に死なれて、その人の気持ちが初めてわかったというか、そのような気がします。今まで人の親の死に対して、「俺はあんたとは仲がいいけど、あんたの父親は知らないんだから。」という感じで

いたのが、ずい分自分と一緒にのことであって身近になってきた。田久保さんの話を聴いていて、やっぱり傍にいただけなんだ、と思います。

それから、早川さんのお話のなかで、別れがちゃんとできなかったということのを伺って、僕はもう少し意志が通じるときに別れたかった、というのがありますが、僕のなかではそういう形で別れていったと思っているのです。早川さんご自身はこういう問題への関心をずっともっておられて、それで一生懸命働いて頂けたんだなと伺えて、たいへん嬉しかった。

【早川】

告知の問題ですけど、私は告知すべきだとは全然思っていないのです。癌にかかったときに、とにかく知らせてもらった方がいいと思っているけれども、癌で病んでいる人も、いま死のうとしている人も、私と同じようにいます。命をもっている人間だということで、嘘をつき合いたくはない。最低限その人が教えてくれと言ったら嘘ではなく教えてあげられるくらいの力をもっていたい、教えてあげてその人の苦しみを少しでもわかってあげられるくらいのところにいたい、と思うだけです。告知すべきだとは思わないのです。

事実を踏まえていたい、それをできたら分かち合いたい、と日常の生活のなかでも……。それが人を大事にすることであり、自分が大事にされることかなと思っているものですから、言わせて頂きました。

【大須賀（発）】

田久保さんがたいへん信頼されてるセラピストのお話を聴いて、すごく心打たれましたが、不信感の問題です。患者さんを大事にする思いで事実を知らせないでお送りしてしまった周囲の人たちは、次に自分が癌になったときに人が信じられないというのです。何を言われても、事実を言われてすら信じられないというように不信感が舞い戻ってしまう。そういう形で広がっていく不信感がひとつの問題として残る、と話しておりました。

何かすごくうなずけまして、だから癌告知というのは、「あなたは癌ですからあと命がありませんよ。」と、そういうことではないそうです。「あなたの病名は〇〇癌であって、状況はこうです。」ということを説明することであって、余命告知とはっきり分けなければいけない。何故ならば、癌にかかった人

の半分以上は、5年以上生きられるようになるそうですね。そういうような数字だったかな、50何%かですね。だから「癌で死んでしまう、もう命はないですよ」、ということとは全く違うのです。そこをはっきりしないと、癌といえば、「あなたはもう死ぬのですよ。」というように誤解して受け取られる虞れがある、ということを書いてましたので、なるほどと思って、病気を事実として伝えるということと、あなたはもう何か月ないのですよということとは全く違う。そこを区別して告知という問題を考えなければいけない、とおっしゃってましたね。そのようなことをいま、思い出したのです。

それから、私はここに来る前の日に、身近かな人ですが、もう帰えれませんということをご家族の方がいっておいりました。本当に何とも痛ましいことで、そのような思いもあってここへ来ております。

【C】

むしろカウンセリング的なところから考えられることもひとつあるかもしれませんが、悩んだり苦しんでる人の話を聞いていると、いくらその人に近づいても、なんか見ていることがありますわね。極端に言えば、私どもが死というものを考えるとき、絶対に死という経験を誰もしたことがない。いま、死に直面している人は一体どのように感じているのだろうと思ったり、あるいは、かわいそうだなと思うけども、そういうものではない世界で生きてるのかと思ってみたり、元気から元気でないところに行く、病気になってやがて死んで行く、という段階を追って行くように思ってる面もあるだろうけれど、そこに直面したときに、死というのは人によってかなりいろいろあるのかな、と思いますね。

そういうようにその人を理解するときに、現象学的なことになりますけども、われわれが健康であるという点から死を考えている、また、聞くことをしていますよね。本当に死が迫っている人にとっては、死というのはどのよに映るのかな、と思ったりもするのです。結局そこで共感できなくなってしまうことがあるような気がするのですね。これは生死の告知の問題というよりも、カウンセリングの究極の部分かな、というようにも思うのですけれども、何かもつと違う世界のなかで感じて生きてる……。

【大須賀（発）】

実際面接をさせて頂いてる方がたくさんおりますが、変容する、治るというような言葉を安易に使っていいかどうか分かりませんが、Aという望ましくない状態がBという望まし状態に変わるというよりも、変わらない壁が大きいように思います。変わってはいくはないけれども、望むようには変われない壁にぶつかっている。そのようなときに初めてA・Bの軸ではなくて、本来のこの生命、宇宙の生命につながる次元に届いてくる、そこへ運ばれて行く、そういう次元があるのではないかなということを強く思うのですね。

学校へ行けないお子さん方のお母さんも、そういう体験を話してくれまして、なんかすごく教えられるのです。A・Bという横に進む軸ではなくて、壁あるがゆえに縦軸が見えてくるということがひとつあるのではないのでしょうか。あらゆる手立てを尽くして尽くしぬいて何もできなくなったときに、パーッと届いていく世界があるのではないのでしょうか。そういうことも展望しながら、私は歩かせてもらっているのです。

自分と共に歩く人たちが望むように変わることは本当に少なく、自分の無力感を強く毎日感じながら歩かせて頂いているわけです。あるお爺さんが言ったことで未だに心に残っているのですが、そのかたは50歳になられて、ご家族が2人精神分裂病になりました。それで、いままでは精神障害の方に対する差別みたいなものを自分はもっていて、自分の家族がそうなってみて差別というのが本当にわかりました、という話をしてくれた。いま、80何歳かのお爺さんになり、南無地獄大菩薩ということ自分の心にいつもくり返しているのです、と淡々とおっしゃってまして、すごいことだと思いましたね。

だから、変わるとか、望ましいように治療が完了するとか、という点からは全く絶望の状況ですが、南無地獄大菩薩とおっしゃたのですね。なんか私はすごく心に沁みておりまして、そういうように心が開かれるのだなと教えられました。

死というものに直面して、それを乗り越える力がわれわれの生命自体にあるのではないのでしょうか、本来。そういうものが届けられるのではないかという感じがしますね。だから、やはりこの宇宙との関わり、パーソンセンタードと

という言葉はまさに人間中心ですが、その意味にはむしろ命あるもの全て、命を中心にするという思いが込められているのではないかというような気がします。パーソンセンタードという言葉は、命あるものの全てが一緒になって助け合って生きている、という意味がこめられており、少しでもそれに近づけていたらいいなと思っております。

【木村】

村山さんに、今日お話するようにお願いしてるし、予定して頂いてるのですね。それで、もう時間がなくなっちゃっています。5時で切り替えて村山さんの方へお廻ししなければいけない時間なので、僕は是非ここで切らせて頂きたいと思っています。

〈時間不足のため、村山さんのプレゼンテーションは、第4セッションに移すこととなった〉

セッション 4

1990年5月5日(土) 9:00~12:00

プレゼンテーション5 村山正治

【増田】

おはようございます。昨夜は遅くまでやっていた部屋があるようですけれども、お元気でしょうか。(笑い) 今日の予定は村山さんの『福人研』から始めることにいたします。その後はとくに予定はありませんので、それぞれのセッションのなかで言い残したこと、あるいは、聞いていて浮かんできたこと、その他気になること、言ってみようというようなことがありましたら、自由に言葉にさせていただく、というように進めてみたいと考えています。時間は12時までですので、その時刻には終わるようにしたいと思っております。

それでは、早速始めていこうと思いますので、村山さんご準備はよろしいでしょうか。お願いします。

【村山】

それでは『エンカウンター・グループによるコミュニティの創造』というタイトルで話をさせていただこうと思っています。皆さんには資料をお配りしておきました。

昨日のお話のなかで位置づければ、小柳さんが全世界的な視野とでもいうような総論で、エンカウンター・グループがわれわれの社会にとってどのような意味があるか、という視点を出していただいたのではないかと思いますし、林さんのリサーチに基づく論文発表(コ・ファシリテーターの問題)は、『福人研』に関して言えば、それがネットワークを創っていくときのひとつの重要なテーマにもなりますので、たいへん参考になって有難いなあと思っておりました。それからもうひとつ、昨日の「トランスパーソナルないしは人間のもっている宗教性の問題」も、初めて触れる世界で、非常に深い感じが自分のなかに

もいくつかありました。

私の方は、この流れでみると各論に入るのかなと思うのですが、実際にエンカウンター・グループを中心にした人との関わりの中かで、ひとつのコミュニティを仮に創ってきた、と思っているのです。それは、ひとつの社会的な実験だろうというように思っています。20年間の非常に小さな社会的な実験、福岡という地域に限られているのですけれども、ひとつの社会的な実験をやっていますので、それをポイントとして話させていただいて、皆さんにいろいろご批判を仰ぎたいと思います。

もちろん、人間関係研究会全体がひとつの日本の社会における実験だというように私は思っているのですけれども、『福人研』でも結構いろいろなことをたくさんやってきたなというように、形になった資料をみても思います。形になる部分よりも形にならない部分というのが、見えない部分というのがすごく大事なのだ、とも思うのです。

そこで、私どもが『福人研』を仲間と一緒にやってきたメインテーマというのは何だろうと考えてみますと、それは、「自立と連帯」という言葉になると思うのです。「自立と連帯」ということは、それほど簡単にできるわけでもないし、人間の、あるいは、人類の永遠のテーマではないかと思うのです。いまでももちろん葛藤があるし、お互いの競争意識はあるし、どうつながったらいいかというトラブルもたくさんあるわけです。けれども、メインテーマをめぐってお互いにいろいろなことをやってきたのではないかというように思っています。

そのテーマのバックグラウンドについて触れますと、ひとつはあの大学紛争のなかに私たちがいた、ということが非常に大きかったと思うのです。あのときに出てきたテーマが、「自立と連帯」ということでもあったし、それからそのなかで一人ひとりを大事にするということが当時あった。それから、三番目はそれに見合ったような社会を創るにはどうしたらよいか、ということがあった。そして、学生諸君によって私もずい分もまれたというのが、大きな背景だったと思う。

それからもうひとつは、ロジャースがバックグラウンドにあって、当時学生諸

君と読んでいたロジャースの『人間論』の考え方があったと思います。

1968年頃ですが、いろいろな学生諸君とロジャースの本を読んだり、その話をしていたが、そのゼミで、当時の状況に対していろいろな向かい方があったと思うのですが、私たちの向かい方は「世の中にどうかかわっていくか」「社会にどうかかわっていくか」という自分の姿勢を問う、あり方を問うことを考えていました。

全共闘運動に近いところで、ノンボリの学生たちと一緒にやってきた。ロジャースのカウンセリングには、人を、一人ひとりを大切にすること、権威を問題にしないこと、対等に進めていくということ、それからもうひとつはジェニユイン（純粋）ということがありますね。それで、当時の大学のなかで建前と本音が違うというのは、ひとつの体質でしたけれども、そうでないところでやろう、というようなことがありました。それがわわれれの精神的なバックグラウンドになっていたと思います。したがって僕らは、できるだけ大学の内ではなくて外でやろうということで動いてきたと思います。

社会的な実験ということを言いましたし、世の中を変えるというようなことを当時は考えていましたけれども、20年やってきていま振り返ってみますと、世の中を変えるなどというのは大変な幻想だったな、と思っています。あの当時の仲間で一人だけ、未だに労働運動で頑張っている人がいますけど、あとは皆それぞれ大会社に行ったりしています。私は教養部から教育学部に移ったのですが、あの当時の学生から見たら、出世志向だったわけです。ただ、自分のやってきたことをまとめるというのは難しくて、何をここで学んできたかということ、模索というか、一人ひとりの生き方を絶えず自分なりに決めていくというか、そういう時に私たちのグループが役にたってきたのではないかとと思っています。

一人ひとりが自分自身の体験過程に開かれて、そのなかで自分はこういうあり方をしたいとか、自分がこうゆうような方に進みたいとかを確認していく作業という意味では非常に役立ったのではないかと。だから、その結果として、皆がいろいろな歩み方をしており、当時の思いとはずい分矛盾しているような部分もうたくさん出てきてるのですけれども、エンカウンター・グループを通じ

たひとつの社会変革というのは、そういうものではないだろうかと思います。

自己実現というようなテーマは、中身がはっきりしない一種のスローガンでありまして、それが社会的なスローガンになってきたときに、そのスローガンに引っ張られてしまって、自分の体験過程とか、自分が本当に何をやりたいのか、ということがはっきりしないまま自己実現という言葉自体を背負い込んでしまう危険性があるのではないかと思います。

自分のなかにもっているそういうものを破壊することも、エンカウンター・グループを体験するなかでなされるかもしれない。「概念くだき」というような言葉がありましたが、そのようなことをやってきた。ですから、一人ひとりの生き方を確認していくと、当然一人ひとりが違うということ、「自立と連帯」というテーマにとっては実ににやっかいなことに対する歩みをしてきたのではないか、というように思います。以上、イントロダクションを説明しました。

それでは、具体的にどのようなことをやってきたのか、ということに触れたいと思います。当時の記録を見ますとエンカウンター・グループはあまりやっていない時もたくさんありました。むしろ、講演会をたくさんやっていました。ただひとつ大事なことは、私たちのためにグループをやっていた、ということです。初めの方にも書いてありますけれども、人のためにやるということよりは、もともとは自分たちのためにグループをやるという姿勢は、いまでもずっと続いており一貫していることでして、どちらかという社会サービスは非常に弱いコミュニティであります。サービスをするということをあまり考えてなかったんじゃないかと思います。

そこで、どのような活動をしてきたかと言いますと、4つの柱がありまして、それもおおい固まってきました。

そのひとつに『運営会』があります。会の運営ミーティングは、当時毎月やっていたこともありましたが、年に一回しかやらないこともあります。

それから『月例会』というのを開いてきました。これは、4月で191回目になりますけれども、いろいろなパターンで繰り返しやってきました。講演会

をやったり、畠瀬さんにも来ていただいたりしたこともありました。いろいろな方、例えば、ロジャースのグループとか、ゲシュタルトとか、内観法とか、精神分析とか、いろいろな考え方の人を呼んでやってきました。これは、インタレスト・グループのはしりだと思うのです。そういうようなものを取りあげていく、というところにロジャースの考え方が多分に入っていたと思うのですが、中身は本当にバラエティーがあります。この5、6年から10年ぐらいで固まってきたのが「ゴニョゴニョ」という言葉で言われているミニ・エンカウンターです。3時間ぐらいのエンカウンターをやっています。

3つ目は、「エンカウンター・グループ」を冬と夏に開催することです。これは基本的にベーシック・エンカウンター・グループないしはジェネラル・グループですが、これを大事にしています。昔はいろいろやってきたのですが、少しくたびれてきたり、ファシリテーターをやりたいという人がなくなってきたりして、冬だけこの研究会の全国版に載せるだけにしました。このようなことに象徴されているように、規則としてとか、絶対にやらなければいけないというようにしてやっていくのはできればやめよう、というようにすすめてきました。そういう意味では、社会的にみると非常にあぶなっかしい団体であるともみられるでしょう。夏の方は、最近全国ネットには載せないで、ローカルな形でやっているという状況です。ファシリテーターもできるだけやりたい人がやるという方針をとってきたのですが、現実はどういかなこともたくさんあります。

仲間同士がなんかあまりうまくいかなかったときには、「じゃあみんな今年はグループをやめて、4泊5日の仲間だけのお遊びをやろう」というようにもしています。私が外国に行っているときには、ある意味で自発的な活動がたくさん起こることがありました。僕がある程度抑圧する働きになっていたのかもしれませんが。自分はメンバーのつもりですが、やっぱりそこが難しい。僕がいないときの方が元気が出てきたり新しいことが起こる、ということがあったりして、なんか非常に悲しいような事態も起こるんですが、……。まあそういうことをやっています。

それから4番目に「エンカウンター通信」ということがあります。これは実

は190号ぐらい出ているのです。初期は手書きでして、仲間との連絡の場になっており、皆の息遣いを感じます。下手くそな字の人もいまして、そういう人が書くので読みづらいの、見にくいの、ということはあるのですが、その人の顔を思い浮かべて「あいつが書いたんだから、しょうがないな」というような気持ちも湧いてきて、仲間のぬくもりが感じられました。

それをできるだけ残そうとか、ちょっと現代離れしたようなところがあったのですが、最近はワープロができて非常に便利にはなりました。通信というのは非常に大事ですね。というのは、規則をつくっていないような会ですから、人間関係だけが不可欠のベースになっているのです。小柳さんの話で思い出したのですが、エンカウンター・グループには目的がないと言われましたけど、人間関係、お互いの関係を創る、関係を楽しむ、関係を生きるということが、先ずは最大の目的ではないかと思うのです。その後で具体的な目的になり、こういうことをやろう、というのが出てくると思うのです。そういう意味でリレーションシップ・ファーストということがあるのではないか、というように思っていたのです。

それで、通信というのは非常に大事なものになっています。「俺たちはこういうことをやりたいよ」というのを仲間に知らせる、それで来るか来ないかはその人の勝手ということですから、例えば「夫婦エンカウンター」というのを募集したのですが、誰も集まらなかったのもそのプロジェクトは終わり、というようなこともあります。そこで大事なことはお客さんをつくらないようにしようという流れです。お互いにメンバーは、相互啓発がもともとのポイントですから、利用したり利用されたりする存在としてあるのです。だから、誰かの教えを聞くという発想よりは、お互いに好きなことをやろうという気持ちが強く、「俺はこんなことをやるよ」といった「この指とまれ」運動の名前で呼んでやっていきましたけど、そのかわり乗らないこともあります。

できるだけ義務感を少なくしようとしてやっていますが、このような「参加型ネットワーク」と呼べるようなことをやっているところでは、勝手にしているというようなところが正面に出てきます。しかし、これは片手落ちになると思うのです。しかし、事務局などキーパーソンになっている人、機関車になって

いる人は、大変な負担を背負っておりながらそれが出ないから見えないでいる。でもそういう人がいなくなれば、たちまちそのグループは潰れる。ですから、やっぱり機関車になる人は必要になるのです。そこで事務局長は2年毎に代わる、とにかく変わる、というのがパターンになっています。

「エンカウンター通信」についてはほぼ以上ですが、最近これがメンバーの自己表現の場というようになってきて、詩を書くというようなこともあります。そして、何か言った時にいろいろ反応してくれるというのはすごく大事だと思うのですが、通信でも反応が載ったというのは非常に嬉しいことです。それを載せることがお互いのつながりを創っていく、という意味ですごく大事なのだということを考えています。

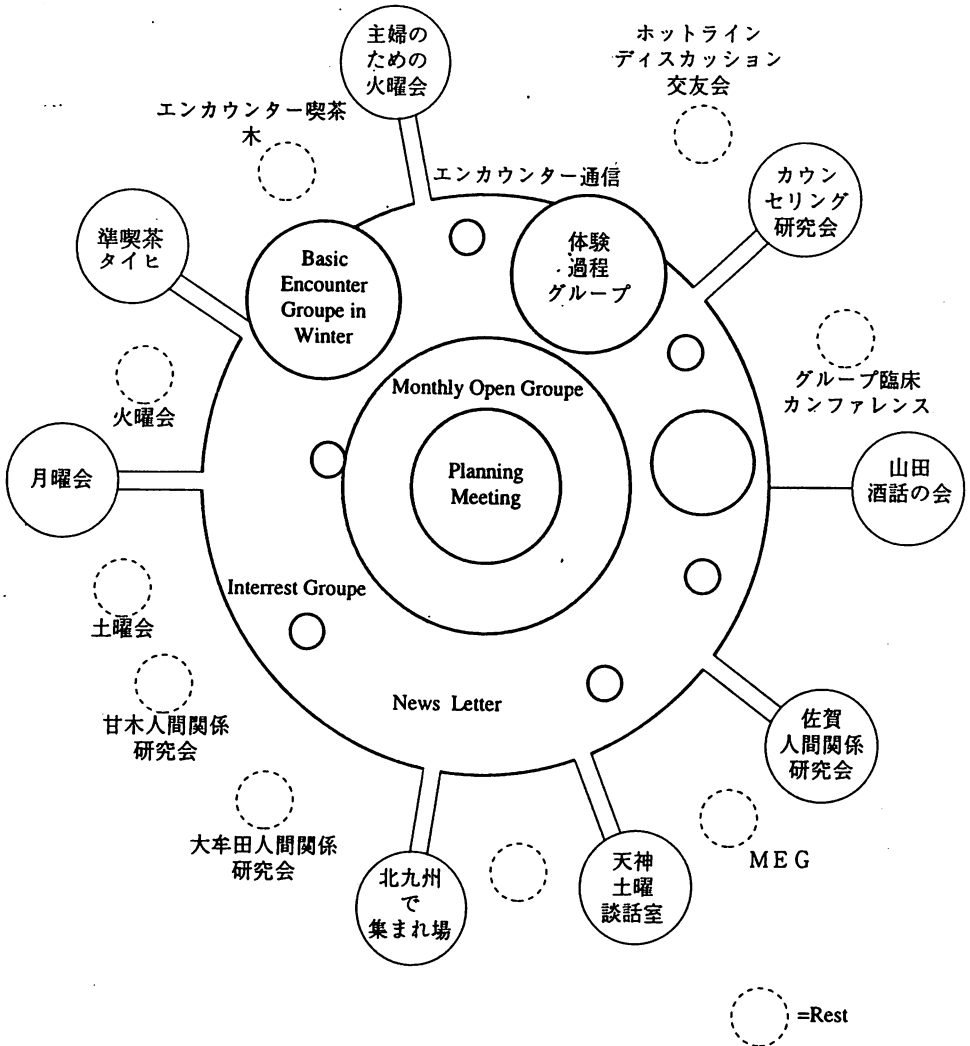
以上、4つの柱になる活動について話してきましたが、そこで何ができてきたのか、ということを中心に話してみたいと思います。

いろいろなことがあるのですが、並べてみると地域の人々のネットワークが誕生したこと、私たち個人への影響とか家庭への影響、教師や研究者への影響、セラピスト・ネットワークの形成などが挙げられます。全部述べることは時間がありませんからできませんが、まずネットワークの誕生ということから触れてみたいと思います。

皆さんに何かわけのかわからない地図のような資料（別図参照）をお配りしてありますけれども、『福人研を中心とする衛星ネットワーク』と呼んでいます。自発的自然発生的の小グループの出没ということが“みそ”でして、出たり消えたりするのですが、ちゃんとシステムのようになっているところもあります。キーパーソンが移動すると、それでなくなるということもあるのですが、ひとつの特色は自分たちが楽しむということがありましたし、Face to Face の関係をできるだけ保とうということがありますから、人数を多くすることは、むしろマイナス要因というように受け止めていますので、宣伝は一切しません。一時新聞に「月例会」の案内を出したこともあるのですが、あまりメリットもなさそうに思えました。講演会のように受けとられ、人を集めないということと違ってしまったのです。

そのかわりどうやってきたかと言うと、エンカウンター・グループがひとつ

図 福人研を中心とするサテライトネットワーク



(1990村山尚子作成)

の大事なヒューマン・ネットワークをつくることにつながり、ポイントになるのです。地域でジェネラルエンカウンター・グループをやって、そのなかで「俺も、なんかこういうことをやりたいな」という人たちが出てきて、その人たちが月例会に出て来て、グループ体験のようなものをしていく。そういうことを何年かやったり、エンカウンター・グループに出ていくことを繰り返す、それからコ・ファシリテーターをやったりするということをすすめる。そして、だんだん「じゃあ、俺のところでもやろうかな」ということが出てきて、

自分の住んでいるところでやろう、というようなのが基本的なパターンであると言えます。そういう形でポチポチとネットができてくる。例えば「主婦のための火曜会」というのがありますが、これは登校拒否の母親を中心としたウィークリーのグループですが、マンスリーのグループだったりします。

それから、『ホットライン・ディスカッション交友会』ですが、これはメンバーの一人が旗揚げしたもので、定時制高校の、つまり、非常に経済的にも社会的にも恵まれない人たちのための交流の場で、その人が中心になってやはり通信を出しています。これも毎月ミニ・グループをやっています。このなかで非常に印象に残っているのは、先天的な血友病の方がおり、そのグループに出たりしながら、何とかして欲しいということがあって、それを通信に載せたら、ある病院の血友病の友の会などから援助がワァーと来たことがありました。そのようなことがあって、多少その人たちに役に立ったかなと思っています。このような方は、就職するのがなかなか難しいのですが、就職ができないからある事業をされるということがあって、「〇〇さんこういうことをやるよ」というようなことを通信に出してみよう、というような形で援助をしたりする『ホットライン・ディスカッション交友会』が続いています。

それから『グループ臨床研究会』ですが、これは野島さんがやられている会です。また、『山田酒話の会』というのは、キーパーソンのひとりだった山田さん（精神科医になりました）が自分のところでお酒を飲んで話す、という会をつくっています。

『佐賀人間関係研究会』は、佐賀で『愛の庵』という館をもっている方がいまして、これは宿泊もできるりっぱなところなのですけれども、その人が中心になってフォーカシングとか自律訓練とか、そういうことをやっています。

『メグ』というのは、ミニ・エンカウンターをメグと呼んでいるのですが、これも佐賀の学校の先生がやっています。それから『大牟田人間関係研究会』は、少しやっていましたが、いまは存在していません。『甘木人間関係研究会』も、5、6年続いていましたが、いまは存在していません。

それから『土曜会』、これもいまは存在しないようです。『月曜会』というのは高松さんがキーパーソンをやっており、いま一番アクティブに動いている

のではないかと思います。『火曜会』というのもやりましたけど1年ぐらいでなくなりました。『準喫茶タイヒ』ですが、これは準喫茶と言っていますが、好きなコーヒーを飲むとなんか実にエンカウンターに行ったような気になる、それを中心に人が集まれる場にするというものです。タイヒというのはドイツ語で、“避難する”という意味があるらしいのです。このキーパーソンになっている方は、ファシリテーターをお願いしたこともあるのですが、その役割を結果として押しつけてしまうと、動けなくなってしまうようになりました。非常にセンスがいい方なのですけども……。自分がオーガナイズして自分の思うようにやれる、というのは非常に大事な要因のようですね。そうすると非常に自由に動かれるのです。

ベーシック・エンカウンターは、僕は好きなのですが、あまり自分に直面させられるような場にはちょっときつい、というように感じる人たちが、かなりこの頃いるのではないかと思います。そこでこれに一番早くに気がついていた人は、何もしないグループというか、「裏グループ」と称して何もやらないで寝てたりしている、グループのなかで。だいたいグループに行ったら何か頑張らないかん、そのためにエネルギーをすごく使ってしまう、グループに出る度に、どんどん、どんどん疲れるという人たちが出てきて、これはどういうことか、グループというのはもっと楽になったりするの筋だったのに、というようなことだったのだろうか、ということが僕らのなかでいろいろ問題になったときに、それだったら何もしないグループをやろう、ということで「裏グループ」と称して始めたら、そういう人たちがドドーッと集まってきたという時期がありました。

それもでもやはり、「村山さん、何にもやらないというのはしんどい」という話になって、2年ほどで止めましたけれども、この方は九重に年に1回必ず参加し、それが自分の楽しみであると言っていました。この人は、自分のペースをきちっと守っていて、最初はかなりバラバラ出ていたのですが、自分のペースとしてはそれが一番いいようでした。

僕自身もエンカウンター・グループの研究者というような部分があって、『福人研』はそういう人々のフィールドにずい分なってきたと思うのです。し

かし、それがいろいろと緊張を呼んでいることも確かで、「俺はあの連中の被検者材料にされたんじゃないわんなあ」という気持ちもだいぶありまして、なかなか難しいところもあります。

ある人が、「研究者、社会人、学生の三部構造になっていて、その三者が時々衝突する」というように指摘をしています、なかなか難しいですね。つまり、研究のことをメンバーの人に役立つようにフィードバックするのは至難の業でして、研究をやった人が得をしてしまうということになって難しいと思います。それにしても研究はたくさん出されてきたことは事実です。

それから「セラピー・ネットワークの形成」がひとつの大事な部分だと思いますが、この点についてはヒューマン・ネットワーク、人とのつながりができるということで、結果として傷ついた人が出たときに「月例会」などが役立つ、と言えるでしょう。エンカウンター流に言えば、「月例会」と集中グループと継続型とを分けることに対して僕は必ずしもあんまりスッキリしていないのですが、何か結果としては、エンカウンター・グループに出たつながりになって、集中体験と現実とをつなぐひとつとして確認できるのではないかな、と思います。グループで充分コミュニケーションができなかったまま終わった人たちが来て、何とか修復するようなことがなされていると思います。また、ファシリテーターには傷ついた人の情報が意外に入らないということがありますので、そのようなことに役立っているかなと思います。

コミュニティという言葉を使ってきましたので、最後に少し触れておきたいと思います。コミュニティというのは複雑な言葉でして、僕らがやっているエンカウンター・グループで考えるようなコミュニティという定義にピッタリしているのは無いようです。ふつう地域とかの意味に使われていますが、僕はここでコミュニティを地域という意味で使っているつもりはないのです。むしろ、「自立と連帯」をうたっているのです。

僕らが意図してきたコミュニティはどういうイメージかということを申し上げておきます。それは、やはりここに来れば安心できるというかな、自分の心の居場所、自分の何か居場所とか、そういうひとつのイメージです。それから自分を大切にしてもらえ、というのがあります。それに加えて、自分の

話を聴いてもらえる、聴いてもらいたいときには聴いてもらえるという部分がありますね。さらに、もうひとつは、そこで何か自分ができること、自分が役立てることがあれば自分を使ってもらっていいというか、そういうようなことがあります。

僕がコミュニティという言葉に対してイメージしているのは、よく心の故郷みたいなものだと言ってくれる人がかなりいて、例えば「月曜会」の時には富山などから帰って来てくれるということがあって、やっぱりいいですね。来た時に寄ってくれる、皆の顔を見て帰る、ということがあります。

「自立と連帯」がメインテーマでしたけれど、もう一度見直してみてどのようなキーワードがあるかと考えてみると、ひとつはさらに「流動」とか「プロセス」ということが出てくるように思います。あまり固定せずによく変わるというか、そういうことがひとつの特色かなと思います。エンカウンター・グループやいろいろな体験をしてきて何が残っているかと見てみると、一人ひとり自分の体験過程に啓かれるなかで、自分の決定とか自分の動きを自分で決めていく、そういうことが僕にとっては大事だったのではないかと考えています。そういう意味で私たちのところに来て、そういう雰囲気浸ったうえで、「ああ、自分にはこういうやり方ではダメだから、どこか違うところに行くよ」というようなことになっていくのも大事な、と思っています。このような意味での模索をお手伝いするということにはそれなりに役立ったかな、というのが結論です。

どうも有り難うございました。

【増田】

どうも有り難うございました。いま、ちょうど10時ですので、10時半頃までブレイクの時間にいたします。

〈休憩〉

【増田】

それでは再開いたします。どなたからでもご自由にご発言ください。

【村山（尚）】

ちょっと文句を言いたいんですけど。「僕自身の」というように言われると、私の立場が困るんです。かなり2人でディスカッションしたんですよ、家で。（笑い）だから、発表しているとき実は私も参加してると思うのです。最後に「僕自身の考え」というように言われると、私の立場が無くなっちゃうんですね。そのところはひと言どうしても言いたかったので……。

【永原】

『福人研』のことをききながら、関係者の方々はもっといろいろなことを活かしていただくといいな、と思いました。実は一番感じましたのは、ここ10年ぐらい水戸を中心に活動をしているのですが、『福人研』はよく村山先生を中心に、学会でも、こういう場でも、こういうことをやっているというレポートや発表が出てくるのですね。それは、すごく大事なことだと思います。水戸の研究所の場合には、「いろいろな活動をされているけれども、どうして発表されないのですか」ということをよく言われたことがあります、なんかいまやると危ないなと思っていたんです。私たちの活動も一種のコミュニティ活動だと思うのですが、なんかこう『福人研』と非常に本質的に違うものがあって、誤解されるような気がするのです。

それからもうひとつは、そろそろ発表しなければいけないなと思っているのですが、それは自分のことばで語らなければダメ、発表させられるという感じではいけない、と思うのです。大須賀先生の力が非常に大きいので、自分の言葉が大須賀先生の言葉になっていないかどうかということをきちんと見極められる人が発表して欲しい、と願っていました。

私自身の水戸での活動の一番大事な点で、これを忘れては絶対にいけないと思ったのは、リーダーシップの分散ということです。リーダーシップをどうやって分散させるか、逆に言うと、固定化したり、独占化したり、カリスマ化したり、教祖化したりしないかということなのです。われわれの場合には研究とかリサーチとかによってもたらされること、つまり研究者自身が自分のやっていることに反するようなことをやったとき、そこに生まれる倫理性と美化される危険性がある。そして、リサーチという意味では非常に素人臭いもので

あっても、スタッフが丁寧にやっていくということが逆に大事なんだな、といま聴いて思っていました。

やはり水戸の研究所は、個人の相談機関という色彩が非常に強いのですけれども、E Gのもともともっていたリーダーシップの分散をしていく必要があるように思います。ドロドロというか、競争心というか、二重三重に仕掛けられてある分散できないその泥沼化というか、そのような状況があって、すごいエネルギーを使わざるを得ない気がします。私が「まあいいこともあったな」と思うのは、そこで鍛えられたということです。食うか食われるかというような側面を含んだ親子の葛藤とすごく似ていると思うのです。やはり、闘いとるといふかそういう面がすごくあったのです。だから発表しなかったのです。

それが言いたかったのではなくて、『福人研』ほどではないけれども、われわれもまた、E Gというものの流れのなかで触発されてささやかに実験してきた、という大げさかもしれませんがやってきています。だから、確かな歩みはすごく意味があると思いましたが、もしかしたら一地方都市のドロドロしたところで私たちのような実験をするということも、すごく意味があるのではないかというように思います。私にとって『福人研』についての発表は、自分たちの活動に照らし、それを振り返るうえで非常に良かったと思いました。

【村山】

リーダーシップの分散ということに関して言えば、僕なんかも含めてですが、三世代代わっているのです。野島さんとか『福人研』と一緒にやろうという世代、それは『福人研』アイデンティティのようなものが比較的あった世代、次に代替わりして、高松さんとかが入ってきた時にいろいろまた考え方の違いが起こってきて、そこで葛藤などが絶えず起こってきて、やっぱり鍛えられました。僕も含めて、そういう人たちが成長して独立していく時の、なんていうか、綱引きの部分と世代が代わった時に動いていく部分のなかで、僕自身が最近まだまだ自分で納得できないでいるのですが、アンビバレントな部分は、やっぱりいままでの伝統みたいなものを維持していくというのがあるのですね。それが摩擦を起こすことになっていると思うのです。

キーパーソンという人は、僕もそうですが、こういうものをつくったらいっ

辞めてもいい、と思うのです。僕もそのつもりでスタートしたのですが、いざいざとなかなか辞められないですね。なんか自分のもの、いろんなものが絡んでそう簡単に辞められない。そこで自分の都合のいいような態勢に持ち込もうとするときに、なかなか難しいことがたくさんありますね。充分解決しているというようには思えませんけれども、ある種距離をもってそのやり方を認めていくいうように考えています。なんて言うか、こちらの欲の問題はなかなか難しいですね。

【永原】

もうちょっと話しておきたくなりました。リーダーシップの分散というように格好いいことを言いましたし、私が分散の方にまわっているように誤解されるおそれがありますので、つけ加えておきます。

固定化への実態は、自分のなかにも両極があると思う。例えば大須賀先生が独占しようとか、自分が教祖になろうとか、そのようなことは、全然思っていないかもしれませんが（笑い）、どちらかという自分分散したいという方を強くもっています。この研究所へ来る前に、自分は友田不二男さんとか、遠藤勉さんとかとお知り合いになる経験がありまして、その人たちがカリスマ化したりリーダーシップを独占しようとしなくても、周りの人が奉るようなところがありました。リーダーシップの分散というのは、もっとハッキリと強く言った方がいいと思うのですが、それはそこを経過しないグループの凝集性とか、そこでのいい体験だったとかいうのをきくと、危ないという感じがすごくあるのです。そして、いろいろなものに利用されてしまう。

私は半分冗談で言うのですが、いまヒットラーが生きてたら、こういうのは見逃さないぞと。現実には、なんとか連合とか、という傾向が出てきていると思うのですが、リーダーシップの分散ということと逆の方向、奉りの方向ということが私たちの内面、つまり、われわれの内なるヒットラーがヒットラーを産み出していく、偶像化していく、神話化していくということがあると思うのです。例えば、ロジャースを語る語り口のなかに、ある人たちのなかにはそういう危険性を感じたこともあります。

私はそれを「小判鮫の喜び」と呼んでいるのですけれど、小判鮫というの

は、鮫にくっついてすごく居心地がいいようです。ですから、安心感とか安全感という概念だけでグループの本質論を見ていくと「小判鮫の喜び」と区別がつかなくなる。有名な江藤淳が、「日本には社会というのはなくて、世間というものがあるのではないか」と言っていましたよね。だからそういう点で、その人自身が方向性をもっていなくても、その周りの人たち、また、私たち自身のなかに奉っていくということ、そして、それによって大船に乗ってその人のお陰で大船に乗っていい体験をするということがある。この難しい問題が、伝統的な街である水戸のなかでやっていくときに痛烈に感じていることですね。

【村山（尚）】

この図をいろいろ考えてみると、村山との違いというか、今までの『福人研』の母体との違いというのを感じながら、自己主張していったグループがこの点なのではないかと思うのです。このエンカウンターとか、『福人研』ネットワークやコミュニティというのは、やっぱり自分の自己決定をしていって、それを具体的に表現できる場として位置づく、と思っているのです。『福人研』コミュニティというようにしているのは、そのなかで違いがはっきりしながら連帯していきたい、という願いがお互いあるのではないかと思います。

ここはトランスパーソナルの世界かもしれませんが、そういう思いを含めて、具体的にはE G通信で交流してるとか、メンバーが交流しているとかという意味も具体的にあるのです。やっぱり違いを強調したいというような、自己主張の表現でもあるし、リーダーシップの分散というか、そういう形でもある、と認めてののです。これを主張していくのは大変なプロセスだと思います。

そのようなことで、それぞれが暖かいコミュニティのなかで安心して自己主張が出てきて、安心できない場合もあるのですけれども、非常にテンションが高い場合もあるのですけれども、これまで続けられてきている実験の場という感じがします。

【A】

私自身がE Gを理解するうえで、いまのお話を聞いていてもう少しお伺いしたいと思ったことがあるのですが、その活動のなかからE Gを理解するいうときに、個人の体験に開かれたなかでの一人ひとりが決めることによって役立

ち、関係を生きるということが最大の目的になる、というのも分かるような気がするのですが、無色透明というか、一人ひとりの色を消してしまう感じもするわけです。それで、求めてきた人がどういうところで役立ってきたか、人が病むとか健康とか生きるということのなかで結果としてどういうところに作用したか、ということがあれば伺いたいです。

【野島】

僕は昨日から少し葛藤を感じているのですが、社会の流れのなかでエンカウンター・グループを導入するとか、適用するという発想は何かどこか危ないという気がするのです。何の目的でとか、社会に役に立つとかというテーマでわれわれはだまされたことがたくさんあるから、それはどこか怖い、というのがあるのです。しかし、一方で僕らは何ができるのだろうかという、自分たちのために役立つことしかやってないという一面はあるが、社会に貢献しているという気持ちはあまり強くないですね。だから、コミュニティというのでも、福岡の地に役だつという気持ちはそうないのですよね。

でも、ただ少し役に立ってるなということを言うとすれば、その人のアイデンティティをつくっていくのに役に立ってる、というような意味かな。僕らがやって来たことは、特定の、例えば病気とか、そういうものにターゲットを決めてやってはいけない。だから、そういうことに役立っていないと言われればその通りだろうと思う。けども、自分がどこにかかわっていくかということ、その人なりにはっきりするのはずい分役に立っているのではないかな。どこにも所属するところがないような人の居場所になっいる、と思います。

僕は、スタートが学生でしたから、どちらかというと年齢層の低い人たちのアイデンティティを固めるのに役立ったというのが大きいかなあ。最近では社会的にはあまりきちっと仕事とかについていないけれども、何か自分なりの生き方をしたい、だけど一般からは疎外されて相手にされないような人たちが、自己主張したり、自分なりの実験をする場所にはなっているな、と思っています。

【村山（尚）】

それで、一人ひとりがそういうように自分のなかで、方向性とか、エンカウ

ンター・グループでの人間性とか、そういうものを学びとって、二次的にということになるのかな、例えば教職員のための相談室を委託されて生徒のことで相談にみえたりしますと、個人面接でやっていく場合が出てきます。いろいろな悩みをもっている校長とか教頭とか教師とか、それから子どもも入るときもありますけど、そういう関係者がそれぞれのものを出し合って、それぞれの立場から問題を聴いてくれみたいなことを通して、ケースのプロセスが明確になったり、子どもにとって人間的に生きていく場を周りがつくっていくのに役に立っているようなこともできやすくなってきます。エンカウンター・グループが二次的に自分の仕事として役にたっていることもあるとは思うのです。

そういう形でそれぞれの領域、『主婦のための会』もそうですけれども、対象がどうなるかというように見る場合は、そのように派生してくるのではないかと考えています。それから、われわれの仲間として非常にフレッシュな人は、健常人とかと一緒にになってコミュニティをつくったりグループをすすめています。そういうことで、非常に複雑な構造をしているのではないかと思います。

【野島】

いまかなり無理矢理に何に役立ったかということを繰り返しているわけですが、村山先生の口からまだ語られていないけれども、僕は、やっぱり人に会いたいと願っている人がまた別の人に会える、という機能は大きいような気がします。どんな人に役立っているかということ、会いたいと思っている人がそこに行けば同じ願いをもっている人とにかくまた会うことができる、というその機能の方が大きい。その後にアイデンティティの確立とかということが、むしろ願ってやるのでなく、結果として生じてくる。

いい教育というのは、欲しいと思っているものとマッチングさせ得る人だというような言い方がある。あるいは、そのあり方を教えることができる人だ、それだけで十分に教育になっている、という言い方があるのですが、そういう点から言えば、今まで全く知らない人がとにかく知り合いになれる、そのことのインパクトというか、有用性というのはものすごく大きい気がします。

学校にいれば学校の人とは知り合いになれるけれども、学校以外の人とは知

り合えないとか、会社の人とか取引のある人とは知り合いになれるけど、それ以外の人とは会えない、ということがありますね。そういうような人と人とをとりもつというか、これにはかなりのパワーが要ることだと思います。結婚相談所などは20万も30万も稼いでいる訳ですから、考えてみればそれと同じ程度の財貨を提供している、と思っています。それは意識化されないくらいですけれども、非常に貴重な効用のように思います。

【高松】

今回ここに来て、いろいろ村山先生ともお話をして、福岡の自分たちのやっているグループを見直すのに非常にいい機会だと思っています。いま、社会の居間という話を聞いて、ネットワークがある『福人研』は僕らにとって親の家というか、実家の居間みたいなものになっているような気がします。「月曜会」は、自分にとっては自分たちで作ったものという感じですが、実家の居間というのはなんか居心地いいのですけれども、いつまでも居てはいけなような場として成り立っているようにも思います。

人と会えるという意味では、なんかすごくルーズなグループですが、例えば『月曜会』は、年中無休というのをひとつの売りものにしていて、正月だろうと何だろうとやるというので、今年はたまたまクリスマスと正月元旦が月曜日でしたが、そうすると「誰が来るんだろう」と思うのですけれども、行くと10人ぐらいいて、「どんなやつが来るんだろう」と言いながら集まって来るのです。お互いにそこで話していて、やっぱり居場所という意味では「正月一日の居場所」とうことになり、それがないと……。そういう意味では非常によかったのではないかと思います。

それと、リーダーシップの葛藤の問題ですが、やっぱりわれわれにとって村山先生が実家の家長みたいなもので、そこで頑張っておられるのは非常に都合がいいというか、そういう気がします。村山先生のような人は非常に有難い対決相手なので、いなくなれると困るなあ。『福人研』が『福人研』として存在し、村山先生が代表ということになっていて、僕はすごくよかったと思っています。村山先生代表の『福人研』と人間関係研究会と、それとわれわれ謂わば若手が、これからどのような関係を、つながりをつくっていくかという

ことは、今回興味のあったテーマだったのです。ですから、ある意味では一部が入って、それともうひとつ別の会をつくってジェネレーションの違う会ができていくのか、そのような問題も含めて福岡のモデルと近い形で、謂わば親の会としての人間関係研究会と、若手のグループみたいなものができるかどうか、なんかその辺も考えたりしていました。

もうひとつ、この研究会は組織のようで組織ではないので、外から来た人はいへん戸惑うと思います。何をやっているのかわからないという感じがすると思うのですが、たぶん効率のいいエンカウンターをやっていないのではないのか。昨日の小柳さんの発表で、エンカウンター・グループは非効率的すぎるのではないかと言いましたが、私はやっぱりこういうモデルはすごく好きで、このなかにはそれこそ強迫性がかなり低いということがあるのではないか、と思います。

【村山（尚）】

私が自己主張をすることは珍しいのですが、今回は思いっきり自己主張をさせてもらいます。高松さんが、お正月でも年末でもというように、そこに居ることが大事だというようなことをおっしゃっていましたが、私はかなり自分たちのものとして使えるというところを探したのです。公の場所は8時までとか、日曜祭日はダメとか、正月はダメとか、ということがありますので、本当に強迫的でなく使える場所をつくれなかな、という感じがしました。

私は、いまそこを運営してるのですが、この『心理教育研究所』は自分のカウンセラーとしての仕事の場であり、それが主なのですが、かなりの部分で自由に時間をこのような運動体が使えるように、かなり無理をしてつくっています。ちょっと自己主張したかったものですから……。

【増田】

それでは終わりの時間になりましたので、残念ですがここまでに致します。この後は最後のセッションになりますので、そのような心のご準備もお願いいたします。

あ と が き

この資料の公刊によって、本会20周年記念事業のすべてが終了する。やっと終わることができ、区切りがついた、という思いである。

何事も後始末が大事であるが、そのあたりまえがなかなかできない。それができたときには気持ちいいし、嬉しくもある。この感じを大切にしたい。これはカウンセリングにつながる点がある、と言えよう。

本会は、もうすぐ30周年を迎える。この資料がそれを考える材料のひとつにも生かされれば、より嬉しい。

大方の活用を念じつつ・・・・・・・・。

1998年10月

文責・増田 實

『人間関係研究会』について

『人間関係研究会』は、エンカウンター・グループを中心とした人間関係の改善と促進の方法についての研究と実践を目的として、1970年春に発足しました。この研究会は、人間関係の分野に関心を持つ研究者と実践家が閉鎖性を打ち破り、新しい人間関係をもとに組織と集団や個人生活のあり方に、より真実で創造的・建設的なものを求めることを課題としています。人間関係こそは、私たち人間が生き続ける限り、世界・国家・社会を通じての大きな課題であり、障壁・闘争・破滅につながると同時に、成長・建設・福祉への道でもあります。この新しい分野に関心をもたれる方々が、この研究会を利用し、経験と知識を交換しあうことを希望しています。

この研究会は、年間三十数回のワークショップやセミナーを開催し、文献資料の配付および機関誌“ENCOUNTER”の発行も行っています。

『人間関係研究会』スタッフ（ABC順、○印は1998年度代表）

畠瀬 稔 畠瀬直子○早川千恵子 広瀬寛子 福井康之 伊藤義美 岩村 聡 木村 易
増田 實 見藤隆子 村山正治 永原伸彦 中川紀子 野島一彦 小野 修 大須賀茂蔵
大須賀克己 小柳晴生 佐藤純子 清水幹夫 高松 里 谷口正己 渡辺 忠

『人間関係研究会』刊行資料

No1	畠瀬 稔	身体接触を伴う人間関係の促進の一技法（改定増補），1972（価	200円	〒	130円……40g）	
No2	小野 修	自分がよみがえった—エンカウンター・グループへの参加経験—，1971 （価	200円	〒	130円……40g）	
No3	ロジャーズ，1967（小野 修訳）	学校組織の主体的変革のための計画，1971 （価	200円	〒	130円……45g）	
No4	畠瀬 稔	エンカウンター・グループについて—来談者中心療法の行動科学的発展— （「教育と医学」18巻1号より転載）	（価	200円	〒	130円……30g）
No5	ジェンドリン&ビービー，1968（小野 修訳）	体験グループ—グループのための インストラクション（増補改題），1972	（価	200円	〒	130円……40g）
No6	北島 丕	高校生のためのグループ・カウンセリング，1976	（価	800円	〒	270円……180g）
No7	増田實，東山紘久，清水信介	ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験，1977 （価	200円	〒	130円……40g）	
No8	畠瀬 稔	企業における人間関係の改善について—エンカウンター・グループの導入— （価	200円	〒	130円……30g）	
No9	渡辺 忠	職場のチーム・ビルディング—人間中心の組織づくりのために—，1985 （価	300円	〒	190円……60g）	
No10	ナタリー・ロジャース（坂川雅子訳）	母と私—鏡の中を覗いて—『生まれ変わる女』より （価	200円	〒	130円……35g）	
No11	小野 修	問題をもつ子どもの親たちのグループ—臨床家のためのマニュアル—，1988 （価	500円	〒	220円……105g）	
No12	小柳 晴生	エンカウンター・グループ多数回参加者としての自己分析	（価	300円	〒	190円……75g）

※〒印は1部当たりの郵送料です。資料代金と一緒に郵便振替でご送金下さい。

上記の資料の 〒761-0112 高松市屋島中町383-3-507 小柳方

申 込 み 先 TEL 087-843-6444（夜9時まで）へ

ご送金は、郵便振替 01680-3-36521 まで

人間関係研究会資料 No.13

編集者 増田 實

発行者 人間関係研究会

〒336-0027 浦和市沼影2-1-705 渡辺協子方

TEL048-861-0487 郵便振替 東京 9-37428

印刷所 〒769-1504 香川県三豊郡豊中町 大西プリント社

初 版 1998年11月 1日

